

初夏書展

令和元年第百二十三回
京都大学書道部書展

日時　六月十五日（土）・十六日（日）
十時～十七時（十六日は受付十六時まで）
場所　建仁寺　西来院　・　禅居庵



巻頭に寄せて

今年四月一日、墨で書かれた二文字の漢字に日本中の注目が集まりました。五月以降になっても、ニュースや街中ではあの日に掲げられた字をよく目にします。

記者会見で掲げられた額入りの「令和」の書を最初に見たとき、私はやや意外な印象を抱きました。見慣れない熟語であったということももちろんありますが、それよりも「平成」のときとの書風の違いに意識が向かったのです。

三十年前（私はまだ生まれていませんが）の「平成」は線が全体に細身で、起筆や収筆は丸みを帯びており、空間を大きくとった結構も相まって、ゆったりとして穏やかな印象を与えるものでした。それに対し「令和」の書は細太のコントラストがはっきりしており、肩をとがらせた転折や、一度入筆してから進行方向を変え、筆の弾力を生かして書き進める複雑な起筆からは、強く厳しい雰囲気が感じられます。

対照的な書風の二つの書ですが、共通しているのは、人々の意識の中で元号そのものと不可分に結びついているということです。世に出たばかりの「令和」の書も、冒頭で述べたように生活の中で頻繁に見かけることで、まさにその意識が形作られている最中だといえるでしょう。

新元号を墨書して掲げるのは、テレビの時代にふさわしい発表方法として前回改元の際に考えられたものだそうですが、たしかに毛筆と墨で書かれた書は見る人の印象に強く残ります。それは一つには、筆の柔らかな毛を使いこなすことで得られる豊かな表現や、紙の白に映える黒々とした墨色という用具本来の特徴によるものです。さらに、現代では日常生活で毛筆を使うことが極めて少なくなっているため、毛筆書が特別な印象を与えるのだとも考えられます。

ところで先に述べた「平成」と「令和」の書風の違い。書者の違いによるところが大きいのは当然だとしても、前例がなかった前回とは対照的に、「平成」の書がこれほどまでに世間に広まったことを知っている今回の揮毫担当者が、歴史に残るものを書く覚悟を「令和」の書に託した――という のは考えすぎでしょうか。

元号の書をめぐる状況からは、毛筆書が現代において大きなインパクトを持っていることを実感します。それは私たち書道部員にとって励みになる事実でもありますが、同時に、作品を書き発表する際に伴う責任を示してもいます。毛筆の豊かな表現力を生かして、少しでも見る人の記憶に残るような作品を作りたいものです。

最後に、この度も書展を無事に開催できるのは、顧問の宇佐美文理教授と行友三輪子様、技術顧問の寺本蒼玄先生ほか多くの方々のご支援とご協力によるものです。この場を借りて心よりお礼申し上げます。

来場者のみなさま、本日は私どもの書展に足をお運びいただき、誠にありがとうございます。新たな時代になり京都大学書道部が初めて迎える書展です。元号のもつ歴史的・政治的な意味を顧みずに安易なお祭り騒ぎに加担するのは避けたいですが、それでもひとつの節目であることは確かです。次の時代を生きる部員たちによる意欲的な作品の数々をぜひご覧ください。

令和元年六月吉日

京都大学書道部部長　石本森羅

顔真卿展観覧記

宇佐美文理（京都大学大学院文学研究科教授）

みなさんは、今年初めに東京国立博物館で開かれた「顔真卿展」、観に行かれたでしょうか。わたくしは、前期・後期と二度行きましたが、ともかくその人出の多さに驚きました。

書道が好きな？みなさんは、有名な顔真卿の「祭姪文稿」、一度は観てみたい、と当然思われるでしょうね。しかし、必ずしもふだん書道に親しんでおられないのではと思われる方々があれほどまで並んで（何時間も）ご覧になるというのは、ちょっと不思議な光景でした。（今回は、外国人の方が多かったのにも驚きました。）

「所詮、原稿でしょ？」とも言いたくなるところですが、いや、原稿であるからこそ、顔真卿の息づかいまでもが感じ取られ、それが貴重なのだ、と言われているということは、いまさらわたくしが述べ立てる必要はないでしょう。

しかし、日本の文豪、夏目漱石の「猫」の原稿が展示されても、あそこまで人が並ぶことはありえません。それに対して、「猫」は、全集本や文庫版など、一体何部売れているのか、見当もつきませんが、その数字は、「祭姪文稿」に集まった人の数をおそらく超えるでしょう。ともに文学作品であるわけで、その「享受の仕方」の違いはいったいどこから来るのか、やはり考えてみたくなります。

この「祭姪文稿」、内容については、詳細に説明がありましたが、展示室の壁に設置されたパネルに書かれた解説をじっくり読んでいる人はわずかだったように思います。しかし、「祭姪文稿」は、まずはこの文章に込められた顔真卿の思いをとらえることが、この作品の十分な理解につながることに疑いの余地はないのに、です。

それは、「祭姪文稿」に限りません。書の作品が、書かれた文章や詩の内容をしっかりとらえた上で鑑賞されることは、むしろ少ないのかも知れません。上記の顔真卿展でも、「祭姪文稿」を除けば、書かれた内容の日本語訳は、展示のキャプションはもちろんのこと、図録にさえ載っていません。

みなさんは、もちろん、御自身の書かれるものについては、意味を十分理解した上で書いておられると思いますが、他の人の作品についても、是非ともそこにも思いを馳せて、鑑賞してみてください。幸いなことに、このような書展の場合には、それを書いた人が身近にいますから、それを簡単に尋ねることできるわけですし。

その顔真卿展にやはり出ていた名品、懐素の「自叙帖」をのんびり観ていたとき、うしろからのぞきこまれた方が、「あ、これは顔真卿じゃないんだ」といって、通り過ぎていかれました。

書を鑑賞する時に問題になるのは「造形」なのか「人」なのか、あるいは「書かれた内容」なのか。難しい問題なのですが、非常に印象的な、会場での一コマでした。

目標を持って

寺本蒼玄（京都大学書道部技術顧問）

書道部へ入部されて早や三ヶ月が過ぎようとしていますが、新入部員の皆さんは、どの様な書を学ぼうかと想いを廻らせていると思います。

高校で書道部に入っていた人、又、小学校のときから書道教室で習っていた人、初めて書道をやってみようとした人等、いろいろな人達がいると思います。

まず最初は何から学べば良いか、部の先輩や顧問の先生に尋ねてみるのも良いでしょう。

一例を挙げると、好きな古典を一つ決めて徹底的に追及していく方法、又は、書体を一年ごとに変えて練習していく方法等があります。実力を求めたい人は、公募展に出品してみるのも良いでしょう。

取りあえず自分の目標を決めて書道を学んでいくと早く身につくと思います。

先ずは、道具を揃えましょう。墨や用紙等は、部内にある物を使っても構いませんが、筆ぐらいは、自分の物を使いましょう。最低、半紙用と作品用の太筆、それぞれ柔かい筆とやゝ剛い（兼剛）の筆を一本づつ、計四本は用意して下さい。

書く書体や、古典により、どのような筆が書き易いかを確かめながら学ぶと良いと思います。

先ず一年やってみて判断するのも良いかも知れません。楽しく学んで下さい。

作品制作の方法——臨書と創作

書作品を作る方法には、臨書と創作の二つがあります。

臨書

歴史上の優れた書の古典を手本として、それをまねて書くことを臨書といいます。書道の学習で最も基本となる方法で、伝統的には次の三つの段階を踏むのがよいとされます。

(1)**形臨**　文字の形や筆づかいを似せて書くことです。古典をよく観察し、できるだけ古典に近づけて書くことが学習の出発点となります。

(2)**意臨**　形にこだわらず、古典の雰囲気や精神を汲み取って書くことです。意臨が重視されるのは、形だけを追っていると時に筆運びのリズムが失われ、浅い印象の書になってしまうことがあるからです。また、古典の中には模本（敷き写し）や拓本（石に刻し、それを墨で写し取ったもの）だけが残り、元の姿が伝わっていないものもあります。そのようなものを臨書する際には、想像力を働かせて書くことが必要です。

(3)**背臨**　古典を見ずに、記憶を頼りに再現して書くことです。古典をいかに観察し、理解しているかが問われます。

形臨、意臨、背臨と進むにつれて、臨書には書き手の個性が強く現れるようになります。臨書は単なる模倣ではなく、ひとつの表現方法なのです。臨書作品は、そのような学習の成果を作品として形にし、発表するものです。

＊

臨書の対象となる古典を法帖ということもあります。はじめから芸術作品として制作されたものもあれば、石碑や手紙、文章の下書きなど、実用的な目的で書かれたものもあります。

京大書道部の書展では、臨書作品のそばに臨書した部分の法帖を掲示していますので、ぜひ作品と見比べてご覧ください。

創作

臨書に対して、自分が表現したい言葉を書くことを創作といいます。自分で考えた言葉を書くこともあれば、漢詩や漢文、和歌や俳句、詩や短歌、歌詞などに題材を求めることもあります。

作品の構成や書体・書風は、選んだ言葉を最もよく表現できるように考えて工夫します。臨書の学習を生かし、古典の表現方法を取り入れると、作品に深みと味わいを出すことができます。

やみくもに言葉を書くのではなく、自らの感動や思いを言葉に託し、それに合った表現の方法を探して書くのが創作作品です。

作品の構成——印と落款

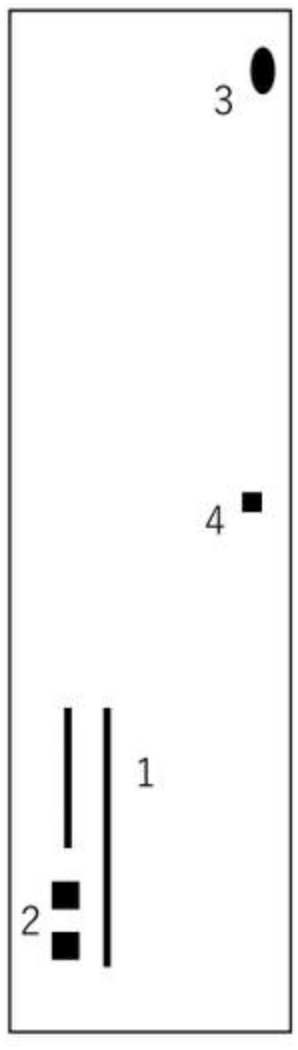
書作品の紙面は本文のほか、いくつかの要素からなっています。

落款

作品の末尾に書く署名とそれに続けて押す印のことです。名前のほか、語句の出典や臨書した古典の名、制作した時間や場所を書くこともあります。

印の種類

落款印以外にも、作品の右上（冒頭部分）に押す引首印や、自由な位置に押す遊印が加えられることがあります。また印は刻り方によって、文字の線を刻った白文印と、文字の線以外の部分を刻った朱文印に分けられます。



1 落款
2 落款印
3 引首印
4 遊印

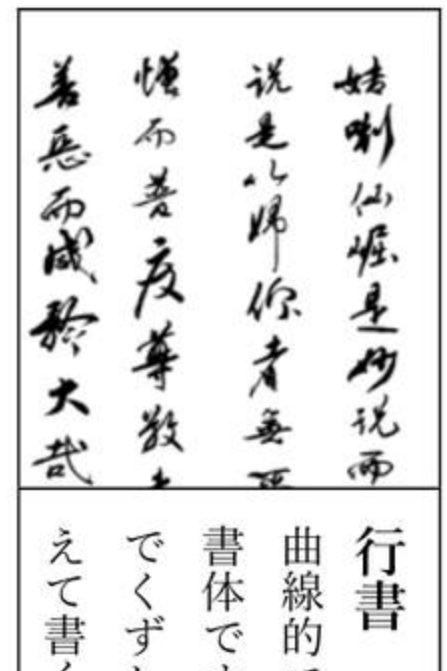
書体について

書作品のジャンルは、使う文字によって漢字・仮名・漢字仮名交じりなどに分けることができます。漢字の書体には篆書・隷書・楷書・行書・草書の五つがあり、篆書から隷書が、隷書から草書・行書・楷書が生まれたとされています。同じ書体でも、書風（文字のもつ雰囲気）は作品によってさまざまです。



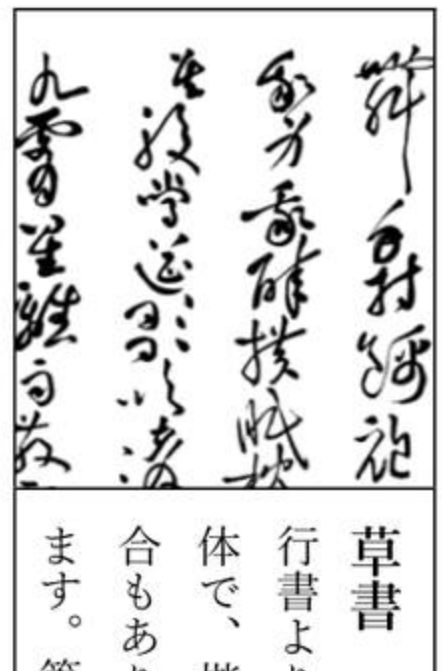
楷書

一点一画を続けずに離して書く書体で、起筆・送筆・収筆の筆づかいがはっきりしているのが特徴です。南北朝時代から発展し、唐代に完成しました。整った美しさをもつ書体です。



行書

曲線的で柔らかい運筆により、点画を続けて書く書体です。楷書に近いものから草書に近いものまでくずし方の程度はさまざまで、行書と草書を交えて書く行草書による作品もあります。



草書

行書よりもさらに大胆な簡略化が行われている書体で、楷書や行書とは字形が大きく違っている場合もありますが、くずし方には一定の規則があります。筆運びのリズム感が魅力です。



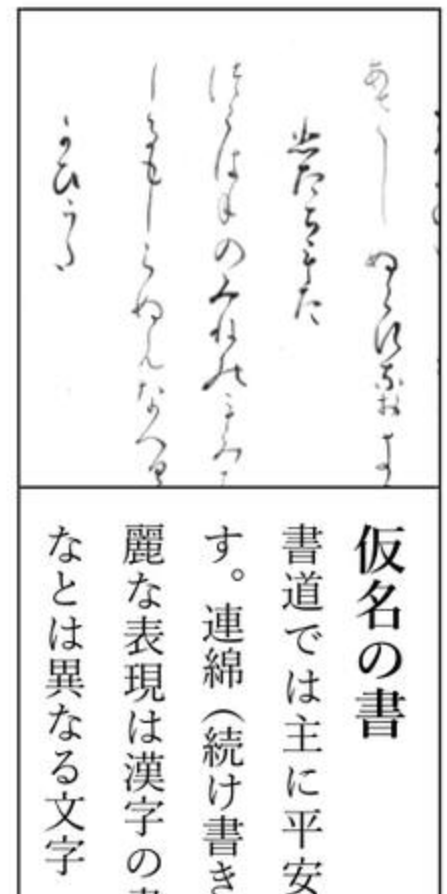
隷書

楷書が成立する以前、漢代に公式な書体として用いられました。扁平な字形と水平な横画、画の終わりに現れる「波磔」の筆づかいなどが特徴で、古風な魅力があります。お札に使われている書体です。



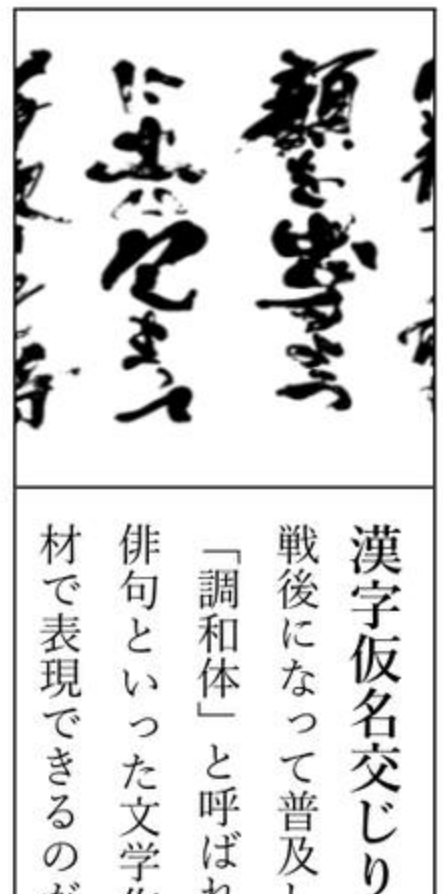
篆書

殷の時代から使われた最も古い書体で、甲骨文・金文・小篆などを含みます。漢字の成り立ちを反映した複雑な字形を保っており、均質な線で描かれるのが特徴です。現代では印章などにみられます。



仮名の書

書道では主に平安時代のひらがなの書を指します。連綿（続け書き）や散らし書きによる繊細で流麗な表現は漢字の書にない特色です。今のひらがなとは異なる文字（変体仮名）も使われます。



漢字仮名交じりの書

戦後になって普及したジャンルで、「近代詩文書」「調和体」と呼ばれることもあります。詩・短歌・俳句といった文学作品や歌の歌詞など、身近な題材で表現できるのが魅力です。



篆刻・刻字

篆刻とは石に文字を刻んで印を作ることです。書体は主に篆書が使われます。書道では名前の印を作品に押すほか、印自体が作品となることもあります。刻字は木などの板に文字を刻すことです。

書展を通して思うこと

文章：鵜川大輝

京大の書展では毎年多くの臨書作品が出品されています。今回は特に**王羲之**の臨書が多く、**興福寺断碑**（臨：野田智）、**初月帖**（臨：上西）等、計五作の出品がありました。**王羲之**といえば四世紀の「書聖」とも呼ばれる書家です。**王羲之**の代表作である**蘭亭序**（臨：松尾、鈴木）についていえば、書道史上最高の名品と謳われ、書は蘭亭に始まり蘭亭に終わるとさえいう人さえいます。**王羲之**により形作られ、**王羲之**を中心に発展してきた書道の一つの流れを今回出品された臨書作品を例に挙げながら追ってみます。

王羲之の死より数百年、初唐に書道は盛期を迎えました。行書においては**王羲之**を集字した**集字聖教序**（臨：中村紀）が作られ、以後の行書の範となりました。また、**王羲之**マニアで知られる**太宗**の**温泉銘**や**王羲之**の偽書を書いた**李懐琳**の**絶交書**（臨：岸根）等々。また先日、**王羲之**を超えた名筆と銘打ち展覧会が行われた**顔真卿**（臨：牛田）。従来の書法を一変したと言われる彼ですが、同時に**王羲之**などの漢魏晋宋の風流を内包しているとも言われます。草書では**王羲之**を規範とした**孫過庭**の**書譜**（臨：吉田）が有名です。こうして唐代に完成した行草体を以後の多くの書家が習い、解釈し、新たな書を作りだしていきます。**顔真卿**の影響を強く受けた宋代四大家の**蘇軾**の**赤壁賦**（臨：小笠原）や**黄庭堅**の**李太白憶旧遊詩巻**（臨：坂本、秋友）、**王羲之**の研究で知られる**米芾**の**苕渓詩巻**（臨：渡部）は、同時代にありながらそれぞれ異なる魅力をもつ名品です。**米芾**、**顔真卿**から書法を得て**王羲之**の臨書等の条幅の名品を多く残した清代の王鐸（臨：安達）や天真爛漫な連綿草の**傅山**（臨：野田恵、坂崎）は現代書家を惹きつけてやみません。日本でも唐に渡り王羲之、唐の書家を学んだ**空海**は三筆に数えられ、最澄にあてた手紙、**風信帖**（臨：大橋）は日本書道史に燦然と輝く名筆の一つです。

歴史を振り返れば心を動かす数々の書蹟が生まれ、互いに影響し繋がって書を形作りました。そして今、それらを現代の私たちが思い思いに臨書しています。書道におけるこうした過去の比重の大きさは、現代の価値観からすれば少し不思議で、芸術としては、もしかしたら伝統に囚われすぎていると言われるかもしれません。ただ、甲骨文字から始まり王羲之を迎えて現代まで四千年が書を通じて繋がり、そして筆によって私たちがその一端に触れているようにも思えて、不思議な、それでいてなんだか嬉しい気持ちになってしまいます。

作品一覧

技術顧問

寺本蒼玄

二回生

秋友祥香
穴田小恵
伊藤迅亮
岩田恵理子
小笠原萌葉
岸根葵葉
北田綾
坂崎亜実
柴田達哉
洲鎌英行
杉山太郎
鈴木和樹
中村紀保子
野口直哉
服部佳乃子
渡部裕貴

創作・『吾志在烟霞』……10
創作・『間有趣』……10
臨書・黄庭堅『李太白憶旧遊詩巻』……29
創作・『花』……19
創作・『絶聖棄智』……19
臨書・米芾『徳忱帖』……12
臨書・蘇軾『赤壁賦』……19
臨書・李懐琳『絶交書』……20
臨書・虞世南『孔子廟堂碑』……20
臨書・傅山『五言絶句幅』……32
臨書・楊峴『漢陳文範碑』……21
創作・『本能寺』……21
臨書・黄庭堅『松風閣詩巻』……33
臨書・呉昌碩『七言絶句幅』……21
創作・『与謝野晶子の歌』……33
臨書・王羲之『蘭亭序』……33
臨書・王羲之『集字聖教序』……23
臨書・作者不詳『泰山刻石』……34
臨書・欧陽詢『九成宮醴泉銘』……16
臨書・米芾『苕渓詩巻』……27
臨書・作者不詳『曹全碑』……37

三回生

石本森羅
市川拓真
鵜川大輝
牛田聡実
大橋葵
越田真由
坂本和歌子
寺田奈津美
中岡大吉
中林亮
野田恵子
松尾有輝也
安田直記
吉田凌祐

創作・『和徐都曹出新亭渚』……11
臨書・作者不詳『西狭頌』……29
臨書・西郷隆盛『西郷隆盛詩七絶』……12
創作・『顔延之詩』……13
臨書・顔真卿『祭伯文稿』……30
臨書・趙孟頫『玄妙観重修三門記』……30
臨書・空海『風信帖』……31
創作・『古稀』……14
臨書・黄庭堅『李太白憶旧遊詩巻』……15
臨書・趙孟頫『前後赤壁賦』……22
創作・『ケセラセラ』……22
臨書・虞世南『孔子廟堂碑』……22
臨書・作者不詳『美人董氏墓誌銘』……33
臨書・傅山『七言絶句幅』……15
臨書・孫過庭『書譜』……25
創作・『渡湘江』……26
創作・『順逆一視』……26
創作・『清徳』……36
臨書・王羲之『蘭亭序』……18
臨書・伝紀貫之『高野切第一種』……36
創作・『四季』……17
創作・『杜甫詩』……26
創作・『讃酒歌』……31
臨書・作者不詳『曹全碑』……14

四回生

安達光寿
覚道直治
勝野初紀

臨書・王鐸『自夏邑入永城作』……11
創作・『杜甫詩』……11
創作・『讃酒歌』……13
臨書・作者不詳『曹全碑』……14

金山優作　創作・『戯』……36
佐山侑莉　臨書・何紹基『蘇軾詞幅』……16
建部壮一郎　創作・無題……24
中村勇真　臨書・鄭道昭『鄭羲下碑』……24
野田智子　創作・『富士山』……35
挟間優美　臨書・欧陽詢『温彦博碑』……24
一二暉生　臨書・王羲之『興福寺断碑』……34
平井達也　臨書・巻菱湖『五言律詩　旅夜書懐』……23
別府華　臨書・最澄『久隔帖』……22
森ちひろ　創作・『令和』……32
　創作・『大化1374年』……31
　臨書・作者不詳『木簡』……20

修士一回生

阿部朱夏　臨書・陳鴻寿『隷書八言聯』……29
小林由佳　創作・『死神』……32
佐武千寛　創作・『奉和春日幸望春宮応制』……32
仲村康太郎　創作・『勢―《孫子》計篇より』……23
　臨書・作者不詳『元羽墓誌銘』……34
原田拓実　創作・『西行桜の歌』……35
原誠人　臨書・『隷書の研究』……36
平野晶子　臨書・橘逸勢『伊都内親王願文』……25

修士二回生

矢野凱己　創作・『王蒙詩』……18
山口和樹　創作・『鐵眼』……26

博士一回生

上西隆太　臨書・王羲之『初月帖』……20

博士課程修了

藤井基弘　臨書・空海『飛白十如是』……30

合作

市川拓真／越田真由／安田直記
　創作・『清平調詞三首』……25
岡本晴香／小林由佳／石本森羅／鵜川大輝
　創作・『雨上がりの希望』……38
金山優作／越田真由
　創作・『遊戯』……27
原田拓実／原誠人
　創作・『万葉集より』……38
矢野凱己／山口和樹／石本森羅／鵜川大輝
　創作・『イチブトゼンブ』……28
新入生合作　創作・『共通部分漢字しりとり』……28
二回生合作　創作・『他己紹介』……28
三回生合作　創作・『俺たちの鴨川デルタ』……28
全体合作　創作・『しんけいすいじゃく』……27

作品紹介

賛助作品

技術顧問　寺本蒼玄　先生

○西来院作品

『吾志在烟霞』

吾が志烟霞に在り

志は山水の景色を探し、楽しむことにある。

細い半紙用の兼剛筆を大胆に荒っぽく使用して迫力を出してみました。



○禅居庵作品

『閒有趣』

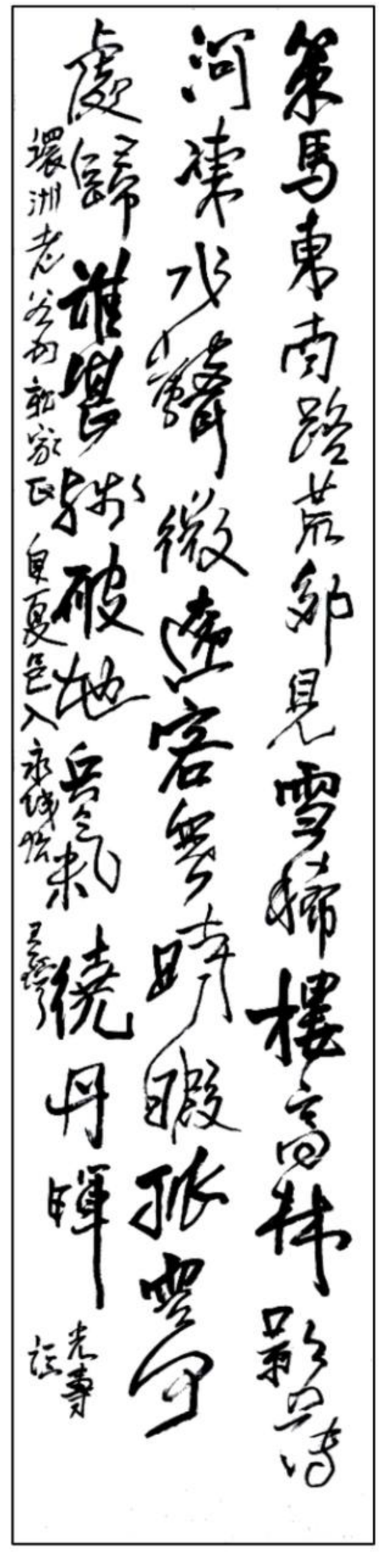
閒に趣有り

塵外の趣きをいう。

直筆でゆっくり暢びやかに表現してみました。



○西来院



1　安達光寿　四回生
臨書　行書　王鐸『自夏邑入永城作』　二尺×八尺

「策馬東南路、荒郊見雪稀。樓高林影薄、河凍水聲微……（略）」
「これを書いたのは私ではない。」



2　石本森羅　三回生
創作　行草書　『謝朓詩』　二尺×八尺

「宛洛佳遨遊、春色滿皇州。結軫青郊路、迴瞰蒼江流。日華川上動、風光草際浮。桃李成蹊徑、桑楡蔭道周。東都已俶載、言歸望綠疇。」
顔真卿の行書を参考にして創作しました。感情のまま自在に筆を運ぶためには、臨書をはじめとする鍛錬がまだまだ必要なようです。

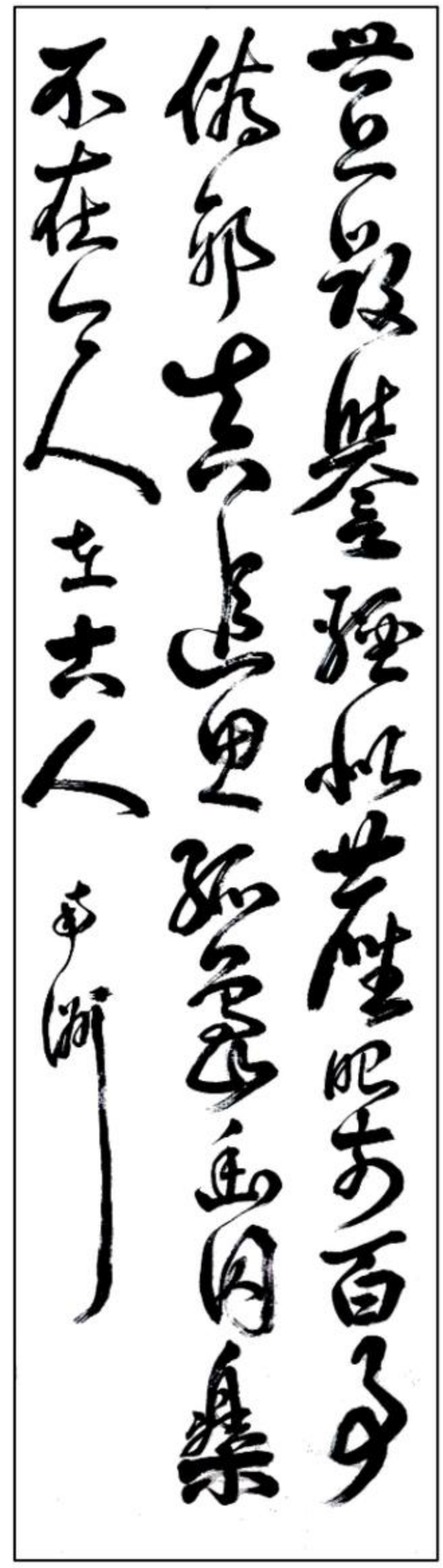
3

市川拓真　三回生

臨書　行草書　西郷隆盛『七言絶句幅』　二尺×七尺

「世上毀誉軽似塵眼前百事偽耶真追思孤島幽囚楽不在今人在古人南洲」

日本の歴史上の人物の書作品を書きたい！という思いから選びました。西郷どんの力強い書風を表現しました。



4

岩田恵理子　二回生

臨書　行草書　米芾『徳忱帖』　二尺×八尺

「林亦在寺也。萊去……（略）」

以前にも何度か作品で書いたことがある米芾をまた臨書してみました。字形や筆の動きなど非常に苦労したのですが、それっぽく見えたら幸いです。



5

鵜川大輝　三回生
創作　行草書　『顔延之詩』　二尺×八尺

「阮公雖淪跡、識密鑑亦洞。沈醉似埋照、寓詞類託諷。長嘯若懐人、越禮自驚衆。物故不可論、途窮能無慟。」あちらを立てればこちらが立たず。詩文や構成、筆に墨。迷子になってばかりです。



6

覚道直治　四回生
創作　行草書　『杜甫詩』　二尺×八尺

「浩劫因王造平臺訪古遊……（略）」今年度から桂キャンパスに左遷され、筆を持つことは無くなり化学と向き合う日々。ちなみに化学などで出てくるコロイドという言葉は、ギリシア語で膠墨の成分の一つを意味するkollaが語源と言われています。僕も膠みたいに粘っこく書道部に居座ろうと思います。以上、京大書道部の保護者コロイドこと覚道でした。



7

勝野初紀　四回生

臨書　隷書　作者不詳『曹全碑』　二尺×六尺

「君諱全字景完敦煌效穀人也其先蓋周之胄……（略）」

ゆったりとのびやかに、生き生きと。



8

越田真由　三回生

創作　隷書　『古稀』　二尺×八尺

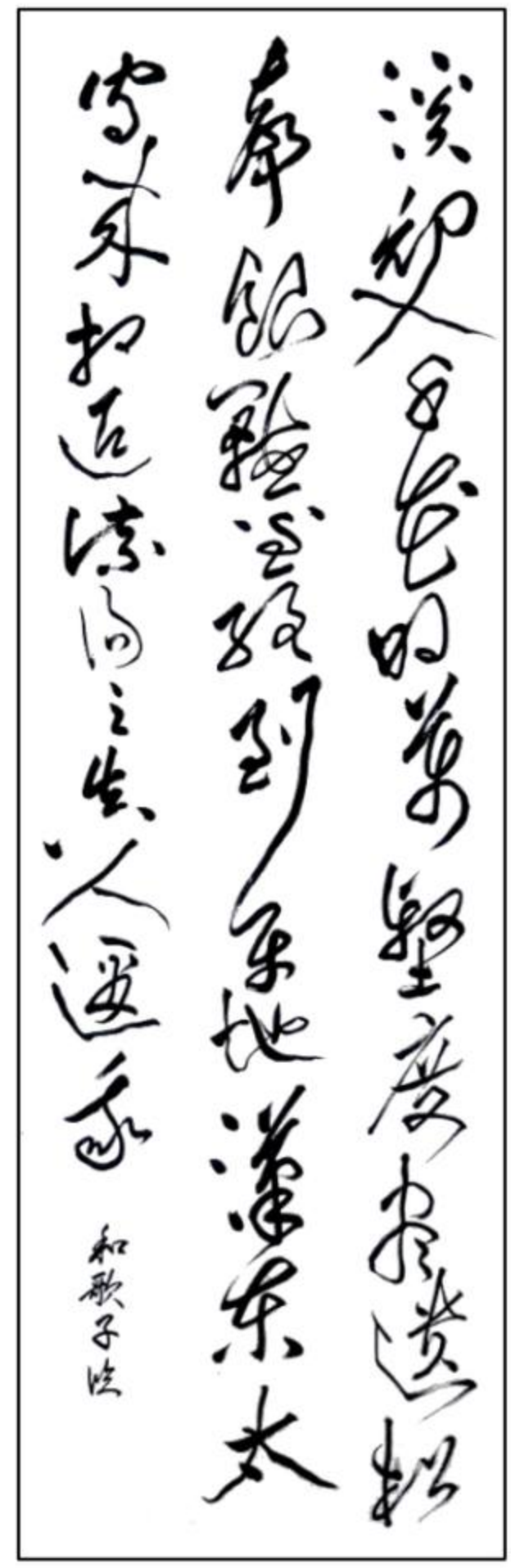
「朝回日日典春衣毎日江頭盡醉歸……（略）」

「かわいい」を目の前にしたときめきを一番大切にいつも作品を書いています。私もこの詩と同じく今が楽しければそれでいい派です。



9

坂本和歌子　三回生
臨書　草書　黄庭堅『李太白憶旧遊詩巻』　二尺×六尺



「渓初入千花明萬壑度盡遺松……（略）」

一回生の初めての書展で半切を出してから徐々にサイズを大きくして行き、ようやく二六まで辿り着きました。元が横作品ということもあり、かなりバランスに苦労しました…。

10

野田恵子　三回生
臨書　行草書　傅山『七言絶句幅』　二尺×八尺



「龍王社鼓鬧村雩、抛却殘書也杖扶。愁無角抵酬花眼、誰好麤糟俯竈觚。」

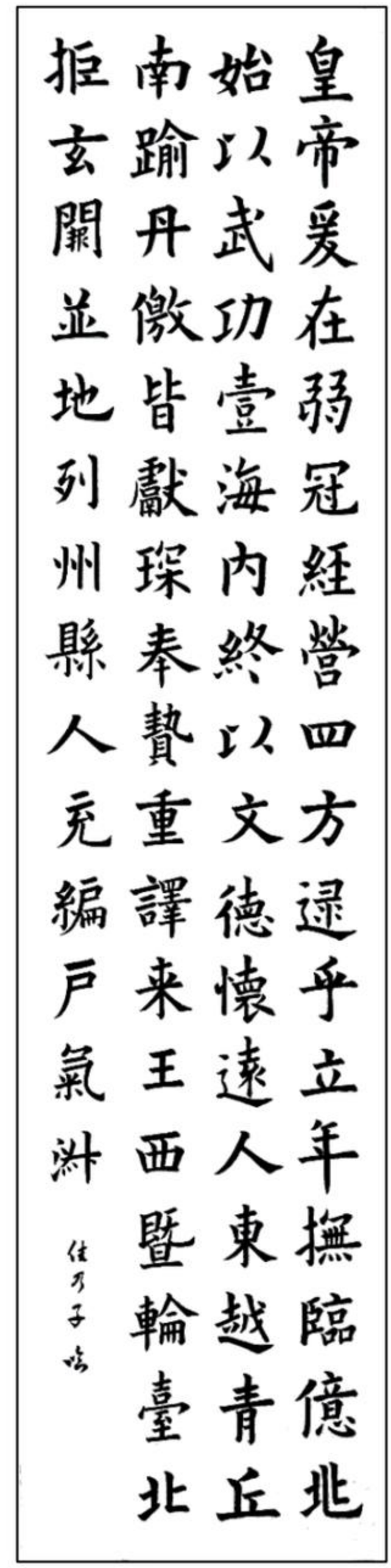
連綿の練習をしたくて選んだ作品です。深く考えずに好きな線を引いていく感覚と、それをつくる楽しさに初めて気づきました。連綿はあってもなくてもいいものかもしれません。しかし、傅山の引きずるような連綿は他とは違う特別な何かがあります。連綿の印象が、そのまま作品全体の印象を作っているように見えるほどです。

11

服部佳乃子　二回生
臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　二尺×八尺

「皇帝爰在弱冠經營四方逮乎立年撫臨億兆始以武功壹海内終以文德懐遠人東越青丘南踰丹徼皆獻琛奉贄重譯來王西暨輪臺北拒玄闕並地列州縣人充編戸氣淑」

楷書をたくさん書いてみました。綺麗な線、形を目指しました。



12

安田直記　三回生
創作　行書　『渡湘江』　二尺×八尺

「遲日園林悲昔遊今春花鳥作邊愁獨憐京國人南竄不似湘江水北流」

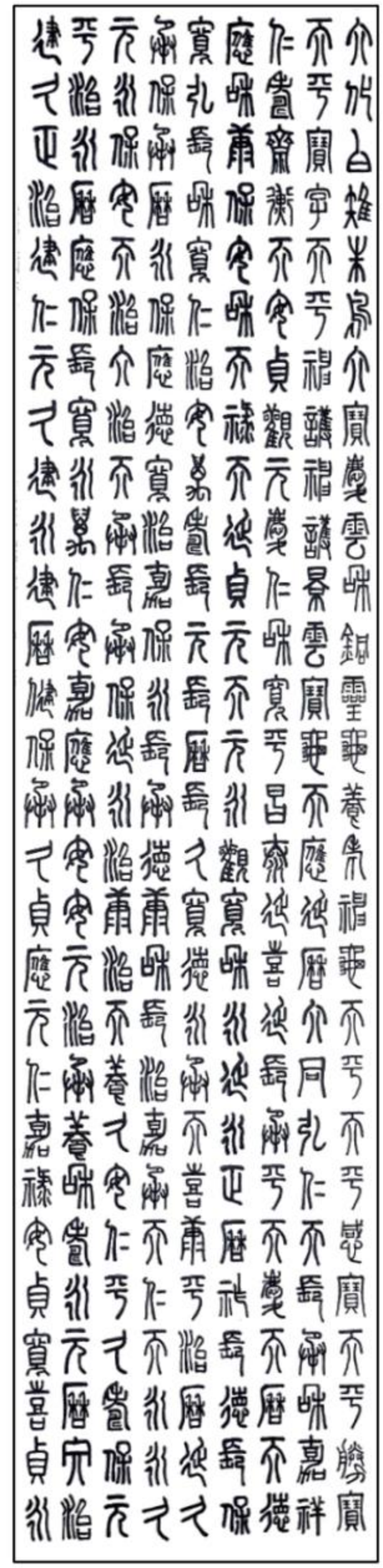
呉昌碩が憑依するように努めました。



13

別府華　四回生

創作　篆書　『大化一三七四年』　二尺×八尺　二連





「大化、白雉、朱鳥……平成、令和」

ついに新元号が発表されました。タピオカでもなく、卍でもなく、令和。まだなんとなく違和感がありますが、きっとすぐ慣れるんだろうなぁと思います。就活の履歴書では、卒業見込は令和二年と書いて少しこしょばゆかったです。



14

矢野凱己　修士二回生
創作　行書　『王蒙詩』　二尺×八尺

「晴樹遠浮青嶂出春江暁帯白雲流」
自分らしくない作品を求めて、どっしりと王道な感じで。



15

吉田凌祐　三回生
臨書　草書　孫過庭『書譜』　二尺×八尺

「摹搨日廣研習歳滋先後著名多従散落歴代孤紹非其或効歟試言其由略陳數意止如樂毅論黄庭經東方朔」
書譜は草書の最高峰の一つと評価されています。また、書論としても名高いです。草書を書くにあたってリズム感を大切にして書くようになっているでしょうか。孫過庭の書論も学んで、今後の技術力の向上に役立てたいです。

16

穴田小恵　二回生

創作　調和体　『花』　半切二分の一

「花　いつの日か咲く私という小さな花」

人生初の書展での作品。書道についての知識・技術が皆無に近い私にたくさんのことを教えて下さった先輩方には感謝の思いで一杯です。夏が目の前に来ている中、少しでも春を感じて頂けますように。



17

伊藤迅亮　二回生

創作　篆刻　『絶聖棄智』

「絶聖棄智／絶聖棄智撫老子語盈明記」

今回は拓も採ってみました。篆刻は進めば進むほど奥深い世界が広がっています。



18

小笠原萌葉　二回生

臨書　楷書　蘇軾『赤壁賦』　半切

「南飛此非曹孟徳之詩乎西望夏口東望武昌」

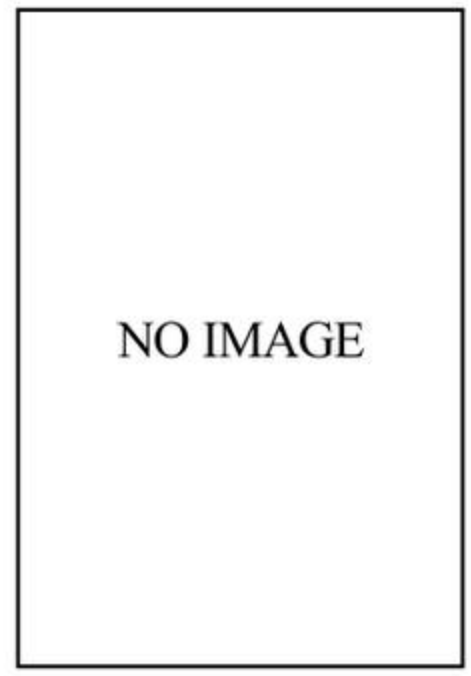
二回生になったことが未だに信じられません。精進します。



19　金山優作　四回生
創作　楷書・行書・草書・かな・隷書・篆書　『戯』　半切二分の一　六連

「胡馬依北風越鳥巣南枝／葉落風不起山空花自紅／天地相合以降甘露／夏草やつ（徒）わ（王）ものど（登）もが（可）ゆ（遊）めの（能）跡／秋風萬木賞春雨百草生／燕雀安知鴻鵠之志哉」

金山っぽい、とは一体何なのか。自分の思うままに書いてみたら予想通り癖の強い作品が出来てしまいました。まだまだ精進が必要です。（ちなみに書いている文章に繋がり・関連性は一切ありません）



20　岸根葵葉　二回生
臨書　草書　李懐琳『絶交書』　半切

「康白、足下昔称吾……（略）」

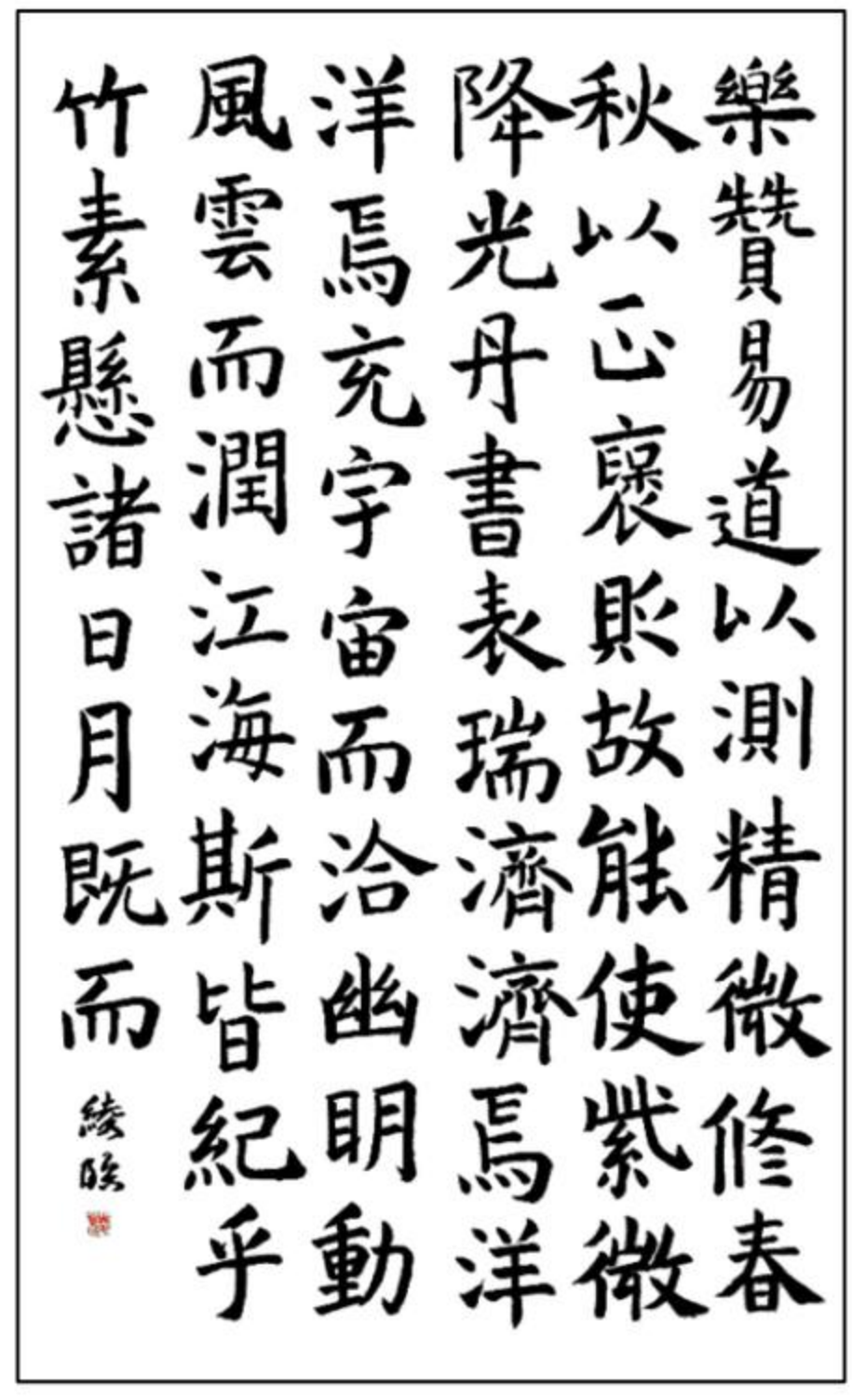
初めて草書に挑戦しました。全体として流れが見られるように、頑張りましたが、難しいですね。



21　北田綾　二回生
臨書　楷書　虞世南『孔子廟堂碑』　70cm×118cm

「楽贊易道以測精微修春秋以正褒貶故能使紫微降光丹書表瑞濟濟焉……（略）」

全紙に初めて挑戦しました。

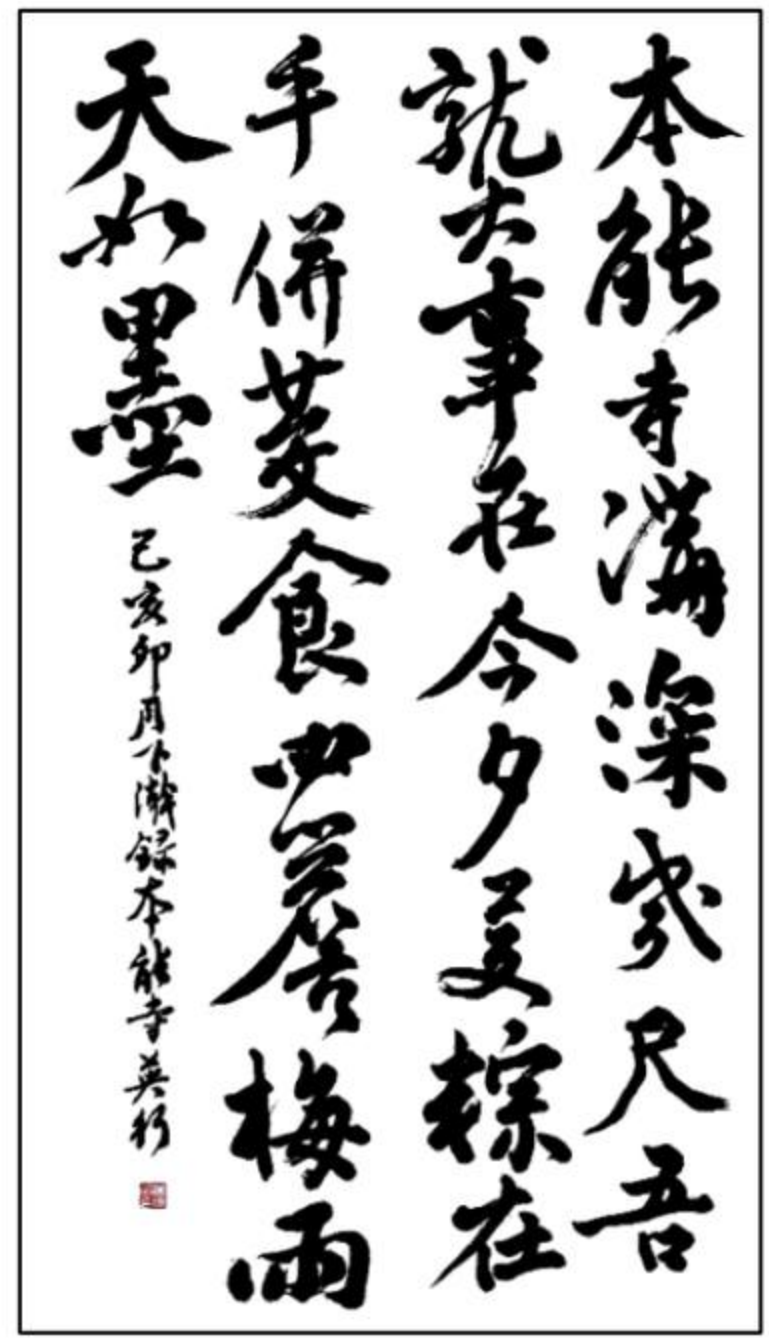


22　柴田達哉　二回生
臨書　隷書　楊峴『漢陳文範碑』　全紙横



「先生諱泰字林宗大（太）原介（界）休人也其先出自有周王季之穆有虢叔者寔有懿徳文王咨焉建國命氏」
楊峴の独特な隷書に惹かれて臨書することを決めましたが、魅力がある分難しかったです。楊峴とまでは言いませんが、いつかは人を魅了する隷書を書けるようになりたいものですね。

23　洲鎌英行　二回生
創作　行書　『本能寺』　全紙



「本能寺溝深幾尺吾就大事在今夕茭粽在手併茭食四簷楳雨天如墨」
明智光秀の気持ちになって書きました。

24　杉山太郎　二回生
臨書　行書　呉昌碩『七言絶句幅』　半切



「悲盦好演安呉筆、飽墨鋪豪意斬新。守闕抱殘吾輩事、車工箸述又何人。」
ぽってりとして重みのある「悲」や存在感のある「車」に惹かれました。

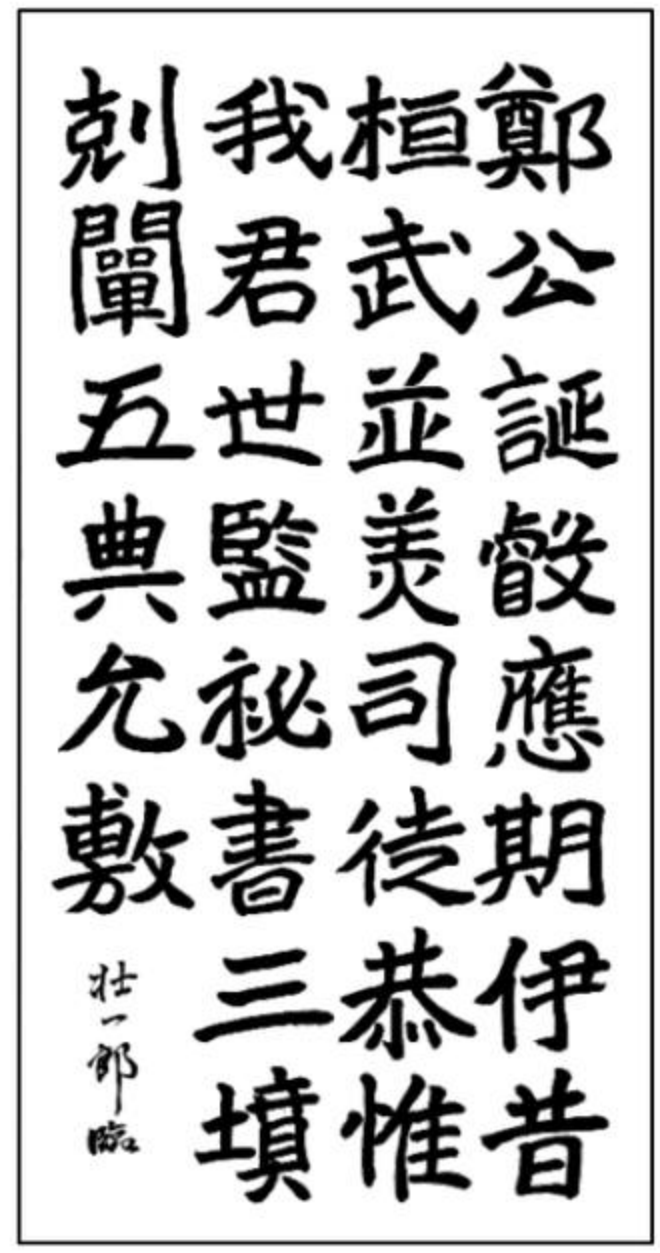
25

建部壮一郎　四回生

臨書　楷書　鄭道昭『鄭羲下碑』　全紙

「鄭公。誕叡應期。伊昔桓武。並美司徒。恭惟我君。世監祕書。三墳剋闡。五典允敷。」

四年間のほとんどで楷書作品を書いてきましたが、今回も楷書です。個人的には力強い作品が好みですが、今回は敢えてその逆に挑戦しようということで、ゆったりとした楷書が特徴であるこの法帖を選びました。四回生にして実は全紙サイズの作品を出品するのは初めてですが、特に作品全体のバランスを意識して書きました。



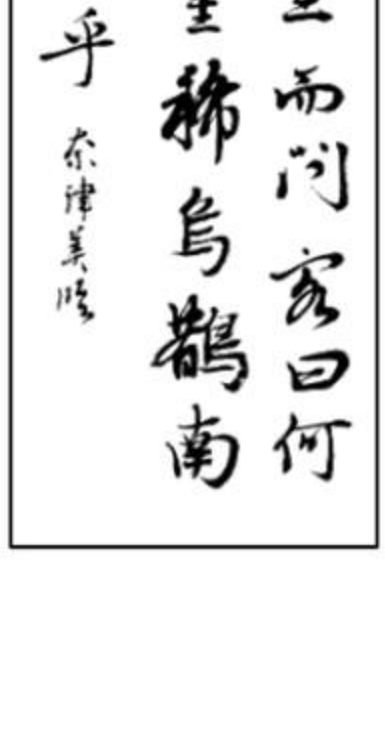
26

寺田奈津美　三回生

臨書　行草書　趙孟頫『前後赤壁賦』　半切

「蘇子愀然正襟。危坐而問客曰。何……（略）」

趙孟頫は元代の書家で、王羲之を踏襲した書風が特徴です。『赤壁賦』があの『レッドクリフ』のことだとは知らず、作品のかっこよさだけで選びました。その雰囲気を出せるように書きました。



27

中岡大吉　三回生

創作　調和体　『ケセラセラ』　半切四分の一

「ケセラセラ　なるようになるさ」

Que Será, Será.



28

中林亮　三回生

臨書　楷書　虞世南『孔子廟堂碑』　半切

「夫子膺五緯之精。踵千年之聖。固天縦以挺質。稟生徳而降霊。裁誕空桑。自標河海之状。」

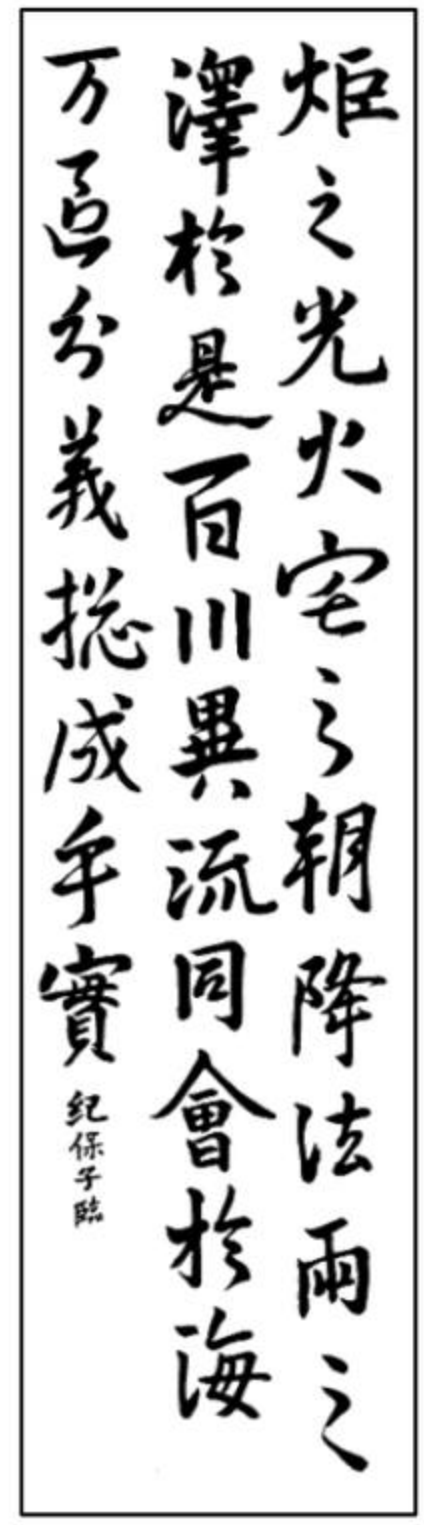
初唐の三大家のうち虞世南の臨書はしたことがなかったので、今回チャレンジしてみました。ゆったりとして優しい雰囲気の字形ですが、油断するとふにゃふにゃした字になってしまいそうで、とても難しかったです。



29

中村紀保子　二回生
臨書　行書　王羲之『集字聖教序』　半切

「炬之光。火宅之朝。降法雨之澤。於是百川異流。同會於海。……（略）」
この法帖はひとつの法帖の中で様々な字体が集められていて面白いと思い、臨書することに決めました。できる限り法帖に近づけて書くことを意識しました。



30

仲村康太郎　修士一回生
創作　篆書　『勢―《孫子》計篇より』　半切

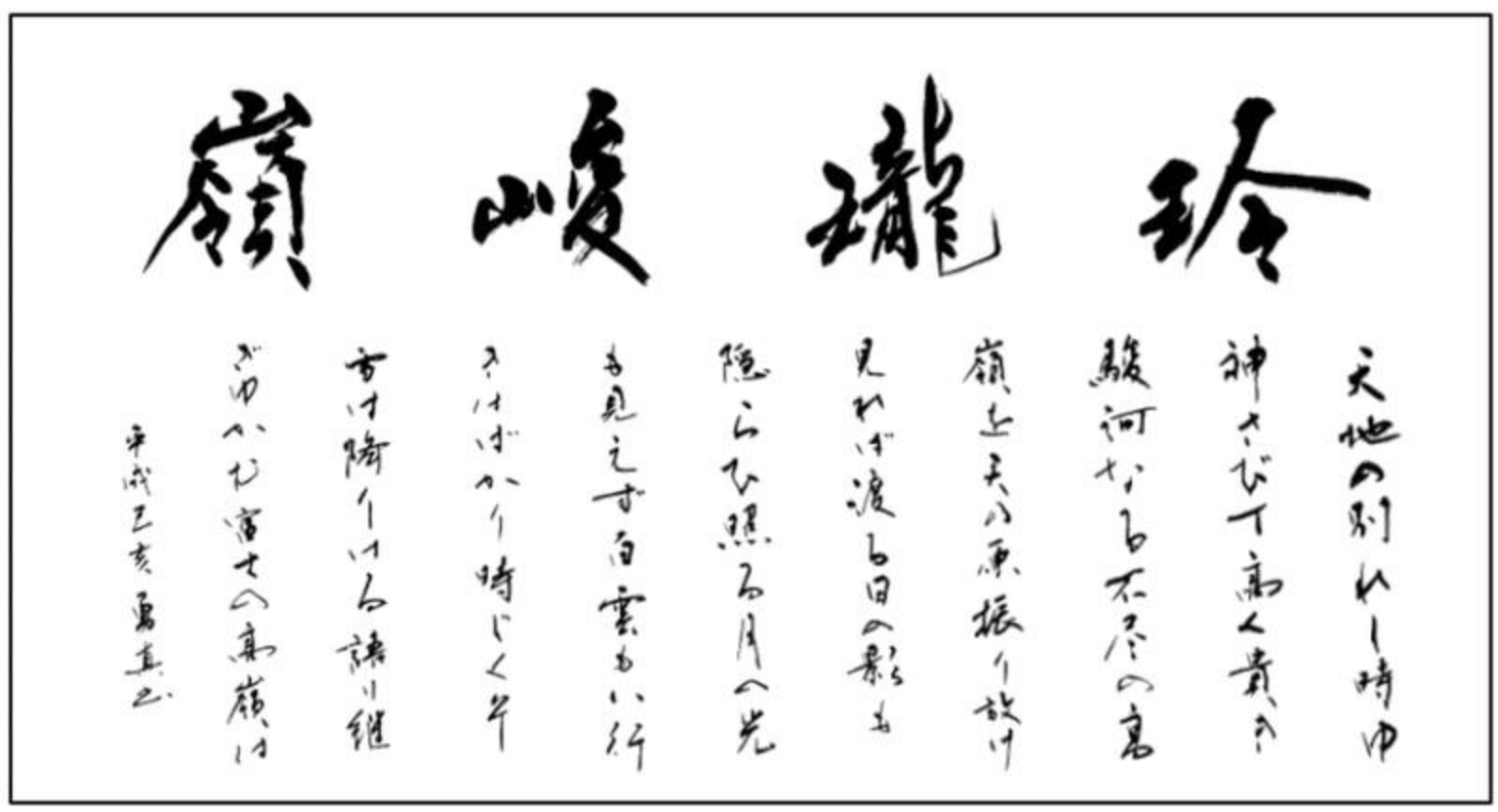
「因利而制權。」
『孫子』計篇に「勢とは利に因りて権を制するなり。（原文：勢者因利而制権也）」とある。「勢」とは、兵法を越えて中国の芸術思想にも用いられた概念である。筆勢然り。この「勢」を、F・ジュリアン氏は「配置から生まれる潜勢力」と捉えている（『勢効力の歴史』より）。その動的な側面ばかり考えてはいけないのである。



31

中村勇真　四回生
創作　行書・調和体　『富士山』　二尺×五尺横

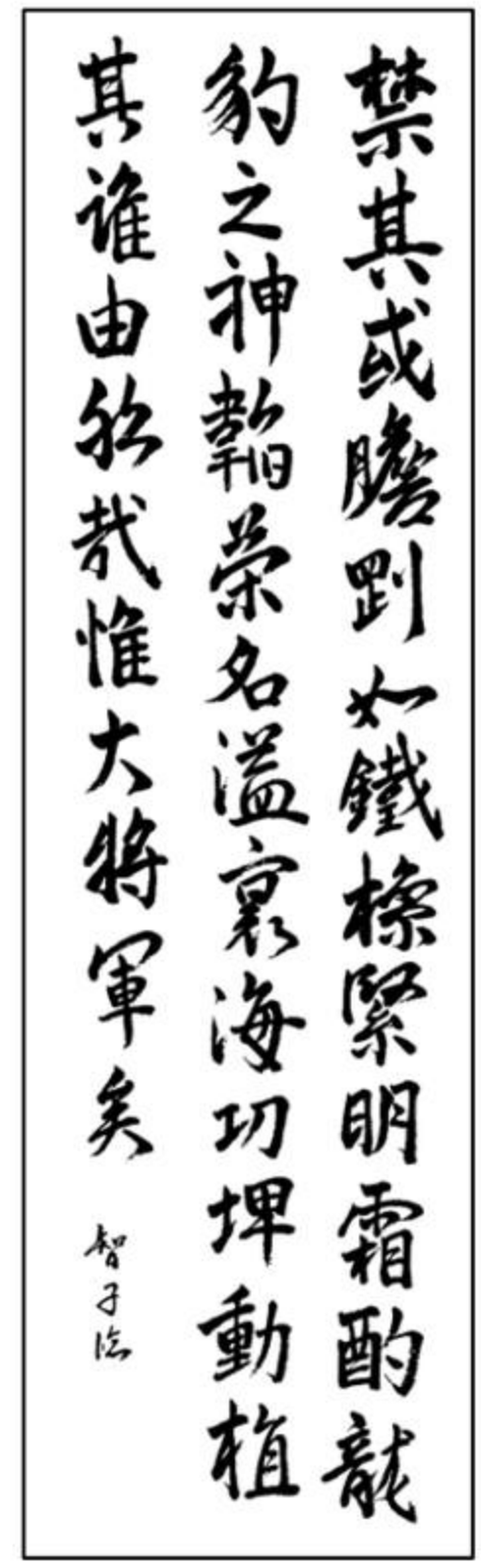
「玲瓏峻嶺／天地の分れし時ゆ　神さびて　高く貴き駿河なる不尽の高嶺を　天の原振り放け見れば　渡る日の　影も隠らひ　照る月の　光も見えず　白雲も　い行きはばかり　時じくそ雪は降りける　語り継ぎ　言ひ継ぎ行かむ　富士の高嶺は」
静岡県民なので。



32

野田智子　四回生
臨書　行書　王羲之『興福寺断碑』　半切

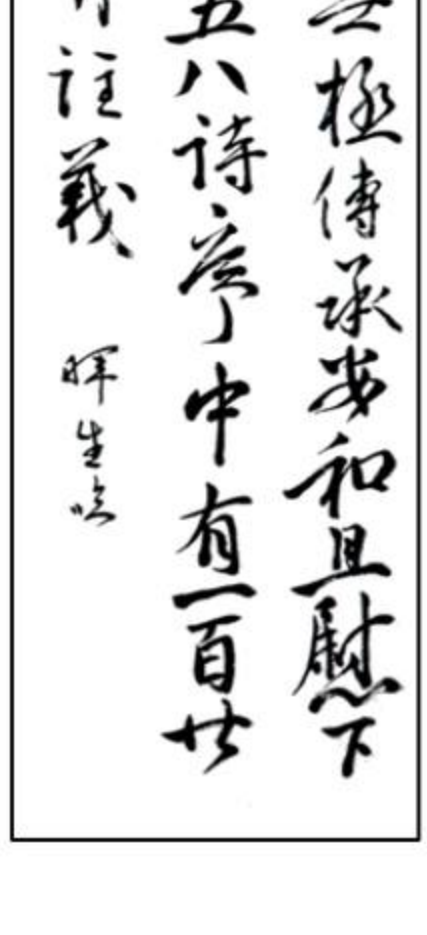
「禁。其或膽……如鐵。操緊明霜。酌龍豹之神。韜…策。名溢寰海。功…動植。其誰由然哉。惟大將軍矣。」
ゆったりとした空間にのびやかさを表現するよう心がけました。



33

一二暉生　四回生
臨書　行書　最澄『久隔帖』　半切

「久隔清音。馳戀無極。傳承安和且慰下情。大阿闍梨所示五八詩序中。……（略）」
この書状は、密教を学ぶために最澄から空海のもとに弟子入りさせた、愛弟子の泰範へ送ったものです。泰範は最澄に可愛がられていましたが、空海に心酔し、最澄のもとに戻ることはなかったそうです。この時代にも三角関係はあったんですね。



34

平井達也　四回生
創作　篆書・隷書　『令和』　約 36cm×約 124cm　二連

「令和維新」「于時、初春令月氣淑風和、梅披鏡前之粉、蘭薫珮後之香。」
「今しか書けない作品を」という思いの下、この作品を制作するに至りました。古くは、六四五年の「大化」から始まった元号。それが今も、日本人にとって身近なものとして存在し続けているのはすごいことだと思います。それではお聞きください。
菅官房長官「新元号は……『令和』であります」
ゴールデンボンバー「れ！　い！　わ！」





35

平野晶子　修士一回生
臨書　行書　橘逸勢『伊都内親王願文』　二八二分の一

「菩薩戒弟子従五位下藤原朝臣平子稽首和南奉納山階寺東院西堂香燈讀經料事側聞惟母慈之悲憎而度尊敬者混善惡而咸矜大哉大悲難得議稱者矣伏惟……（略）」

修士課程に進学し、新しい環境に緊張しながら過ごした四、五月を支えてくれたのが束の間の書道タイムと書道部の存在でした。故きを温ねて新しきを知る。書道においても学問においても、この言葉を胸に、柔軟さを失わないように精進していきたいと思います。



36

藤井基弘　博士課程修了
臨書　飛白体　空海『飛白十如是』　二八二分の一

「如是因如是性　如是相如是力」

「法華経」序品の文章を飛白体（かすれ）で書いたものである。この書体は唐の時代に存在し、空海が日本に伝えた。中国でもわずか二、三の石碑に書き残されているだけである。神護寺にあったのだが、盗難に遭い金泥をとるために燃やされた。その数日前に博物館の者が感激して写真に撮らせていたので目にすることが出来る。



37

松尾有輝也　三回生
臨書　行書　王羲之『蘭亭序』　半切

「永和九年歳在癸丑暮春之初會于」

一番有名な人の一番有名なやつです。



38

松尾有輝也　三回生
創作　篆刻　『順逆一視』　約 25cm×約 18cm

「順逆一視」

初篆刻作品です。順逆は幸せと不幸せ、一視は同じものとして見ること。「子を授かれば母親の命は危険な状態となり、大金を得れば盗人に狙われる。つまり、どんな喜びも心配の種になる。逆に貧乏になれば節約をし、病気になれば体を労るようになる。すなわち、どんな心配ごとも悪いことではない。本当の道に達した人は順境も逆境も同じように見ることができる。」菜根譚より



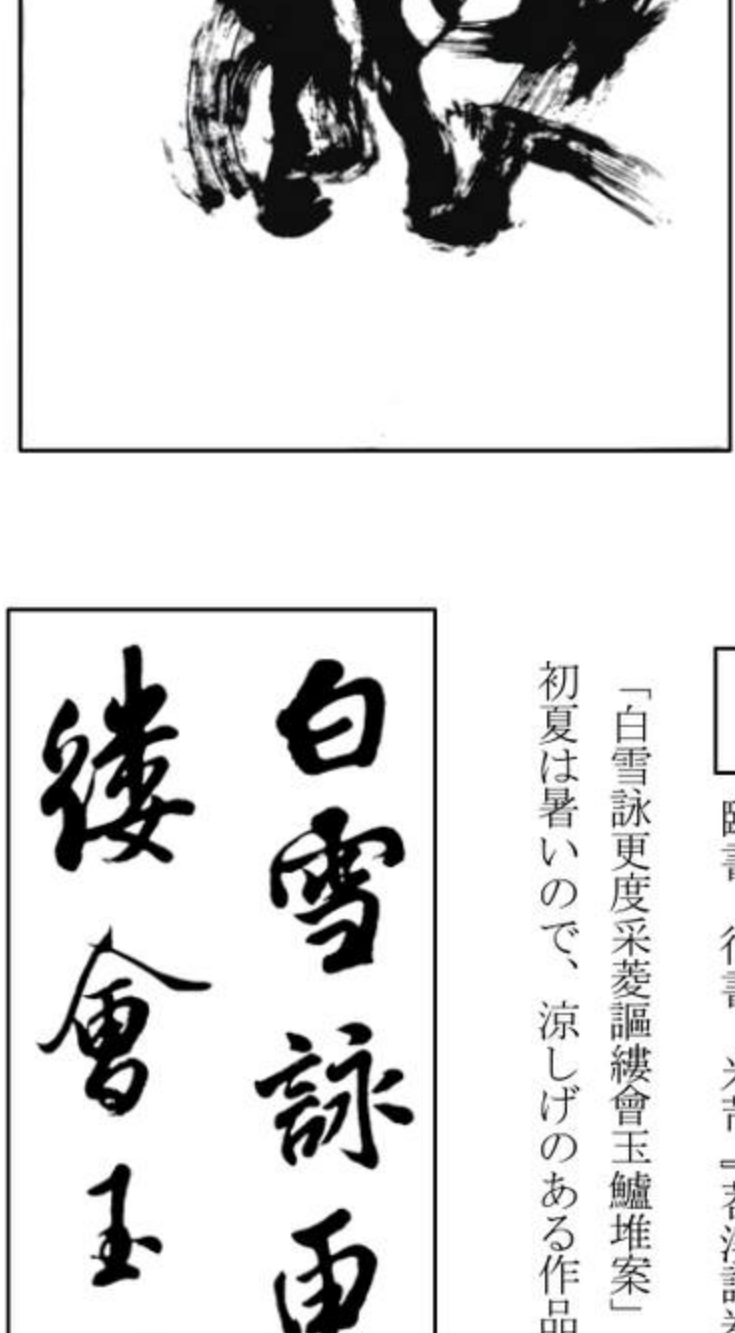
39

山口和樹　修士二回生
創作　行書　『鐵眼』　全紙

「鐵眼」

〝鐵眼〟（すべてを見通す見識）

強すぎでは？



40

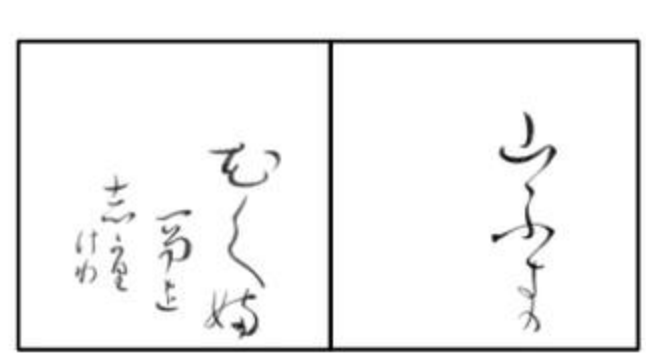
吉田凌祐　三回生
創作　かな　『四季』　半切

「名をもたぬ京の桜はなかりけり」「山吹の花くふ馬を叱りけり」「杉谷や山三方にほととぎす」「秋立つやほろりと落ちし蝉の殻」「露なくて色のさめたる芙蓉哉」「冬ごもり達磨は我をにらむ哉」「煤はきのここだけ許せ四畳半」

先日、正岡子規の俳句の世界に出会いました。司馬遼太郎『坂の上の雲』がそのきっかけです。子規は明治時代に近代俳句を作り上げた人物の一人です。写実的な俳句ゆえに、子規が見た景色が浮かんでくるようで面白いです。左はその一部。







41

渡部裕貴　二回生
臨書　行書　米芾『苕溪詩巻』　半切

「白雪詠更度采菱謳縷會玉鱸堆案」

初夏は暑いので、涼しげのある作品を目指しました。



42

岡本晴香　六回生　・　小林由佳　修士一回生　・
石本森羅　三回生　・　鵜川大輝　三回生
創作　近代詩文書　『雨上がりの希望』　二六横

「降り続く長い雨の最後に静かに種が顔を出すように土に包まって芽吹きを待った雨上がりの希望」

京大書道部では異端（?!）の羊毛使い四人が集いました。一行ずつ筆をリレーして書いているので、それぞれの味を楽しんでください。



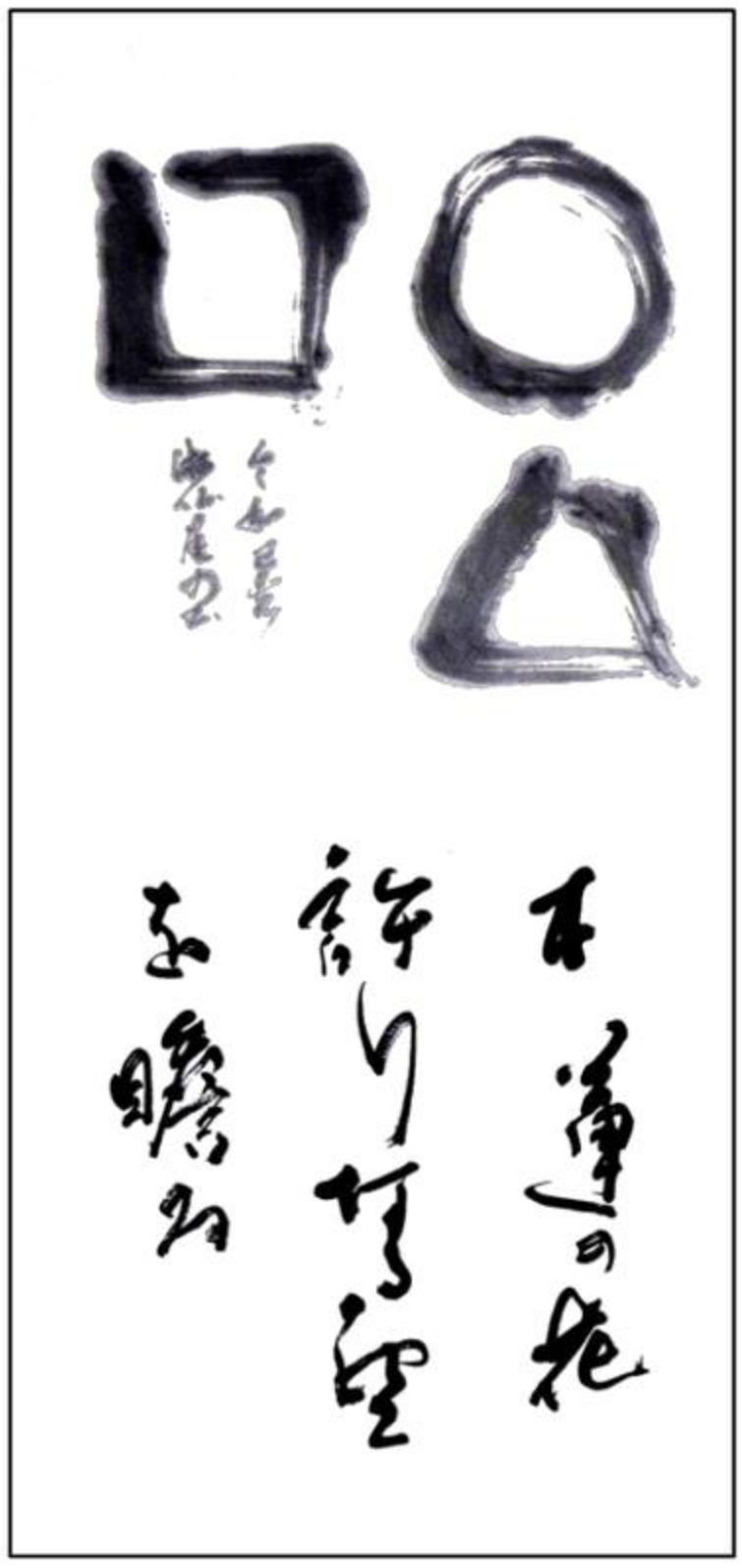
43

矢野凱己　修士二回生　・　山口和樹　修士二回生　・
石本森羅　三回生　・　鵜川大輝　三回生
創作　行書ほか　『イチブトゼンブ』　52cm×114cm　二連

「森羅萬象」「欲爲花明看遠樹　不令柳暗入疎簾」「〇△□」「木蓮の花許りなる空を瞻る」

世界のすべてを識ることなど、できるのだろうか。まして、それを紙上に表現するとしたら——。でも案外、手がかりは向こうの木の枝や見上げた花々にあるのかもしれない。





44　新入部員合作
創作　『部分漢字しりとり』
書道部に入って間もない新入部員の初めての書展作品です。漢字の共通部分を皆でしりとりで繋いでいきました。どこが共通部分なのか皆さんも考えてみてください。

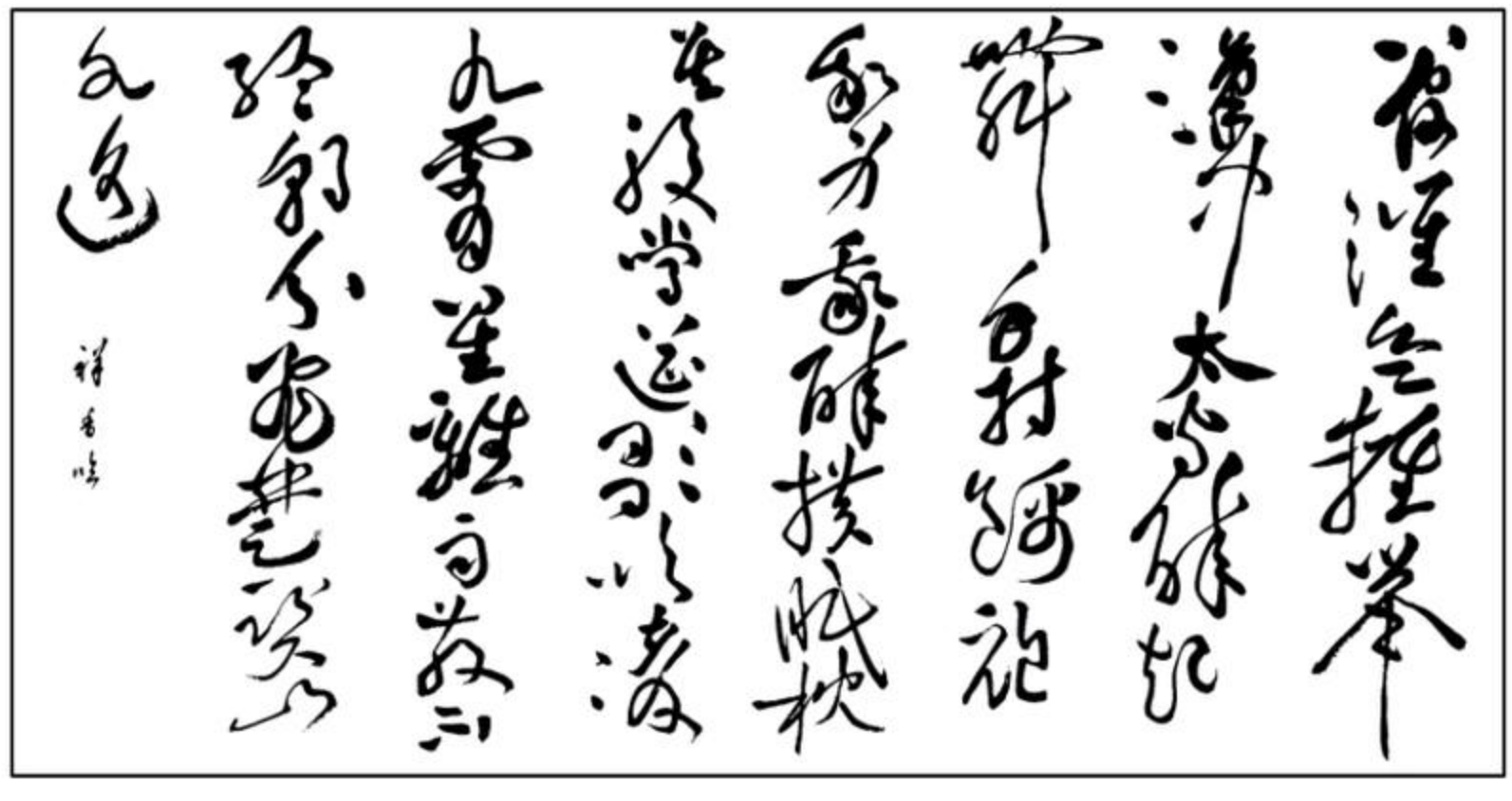
45　二回生合作
創作　『他己紹介』
おはようございます。こんにちは。こんばんは。今回私たち二回生は、他己紹介をしました。タコといえばたこ焼き。というわけで、この夏の目標は、二回生全員でタコパをすることです。

46　三回生合作
創作　『俺たちの鴨川デルタ』
三回生全員で一人一画ずつ書いて作品を仕上げました。俺たちの鴨川デルタをご覧ください。

47　全体合作
創作　『しんけいすいじゃく』
同じ古典から抜き出した二字熟語となる二枚を探してください！　裏をめくると答えが書いてあります！　ゲーム感覚で楽しんでください。

○禅居庵

48　秋友祥香　二回生
臨書　草書　黄庭堅『李白憶旧遊詩巻』　全紙横



「管催欲輕舉。漢中太守醉起舞。手持錦袍（覆）我身。我醉横眠枕其股。當筵歌吹凌九霄。星離雨散不終朝。分飛楚關山水遙。」
混沌とした詩文だなあと思いました。作品としても、行が傾いていく独特な雰囲気が出せていれば良いのですが。

49　阿部朱夏　修士一回生
臨書　隷書　陳鴻寿『隷書八言聯』　短冊　二連

「散此緗編遲還芳札　偶有喜酒爰撫素琴」
書展に出品するのは最早意地です。リビングのインテリアになるような、お洒落でこじんまりとした、お手頃な作品が作りたいですね。





50　石本森羅　三回生
臨書　隷書　作者不詳『西狭頌』　半切

「錢。郡西狹中道、危難阻峻、緑崖俾閣、兩山壁」
摩崖らしい伸びやかさと八分隷の端正さを兼ね備えた古典です。長鋒の羊毛筆で書いています。



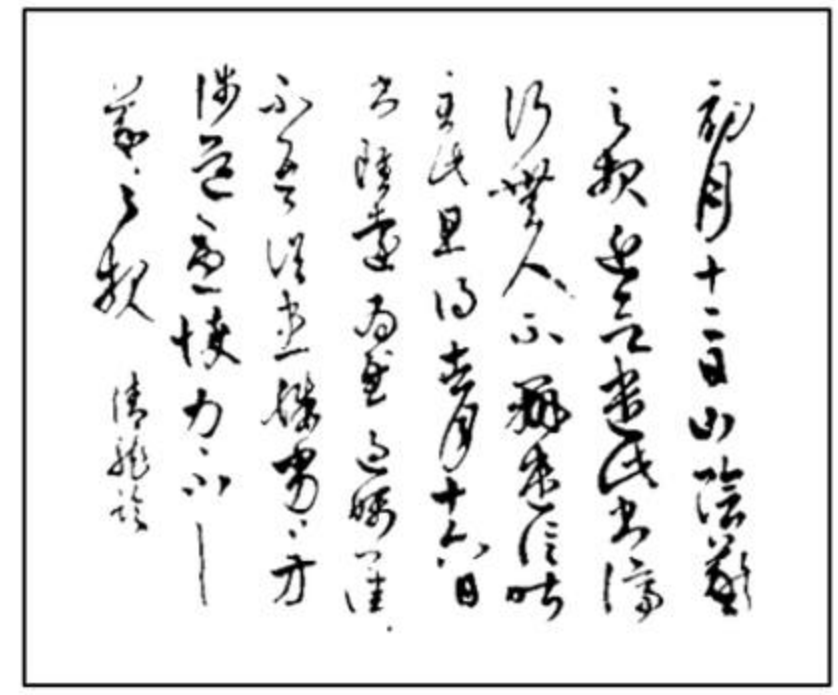
51

上西隆太　博士一回生

臨書　草書　王羲之『初月帖』　27cm×34cm

「初月十二日。山陰羲之報。近欲遣此書。停行無人。不辨遣信。昨至此。且得去月十六日書。雖遠慰爲慰。過嘱。卿佳不。吾諸患殊劣々。方渉道憂悴。力不一々。羲之報。」

書聖・王羲之の晩年の尺牘（手紙）です。「初月」の書き出しに魅かれて臨書しました。王羲之の書は古来手本にされてきましたが、真筆は一本も残っておらず、『初月帖』も唐代の精緻な双鉤填墨による複製とされています。



52

牛田聡実　三回生

臨書　行書　顔真卿『祭伯文稿』　半切

「招討使又遷工部憲部二尚書再兼御史」

くるりと回る部分が多く、苦しめられましたが、特に後半の流れを感じる部分は楽しかったです。ご批評お願いいたします。



53

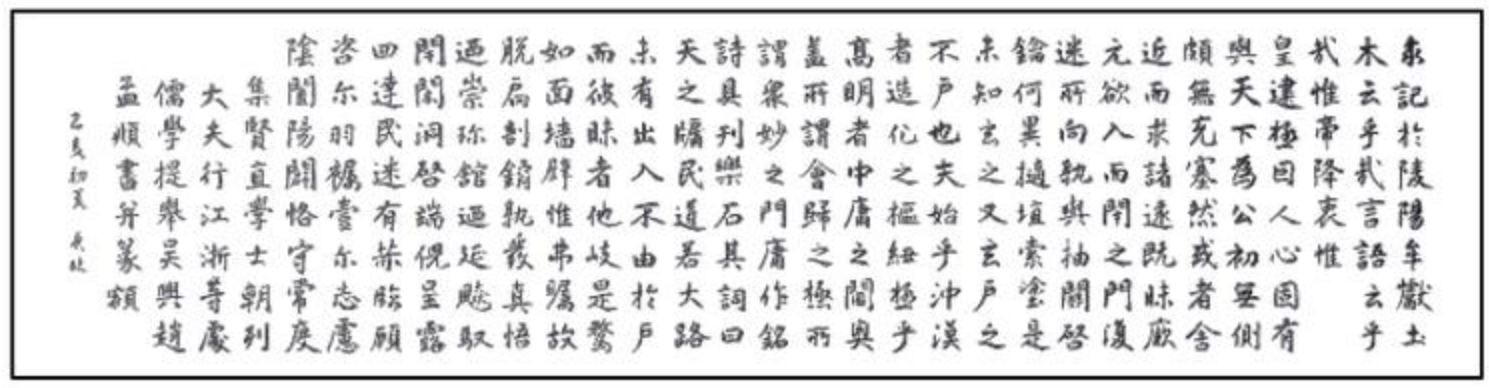
大橋葵　三回生

臨書　行書　趙孟頫『玄妙観重修三門記』　半切横二連

「天地闔闢，運乎鴻樞，而乾坤為之戸。日月出入，經乎黄道，而卯酉為之門。……（略）」

普段の私の文字とは対極の雰囲気を持つ法帖です。たくさん書きました。





54

大橋葵　三回生

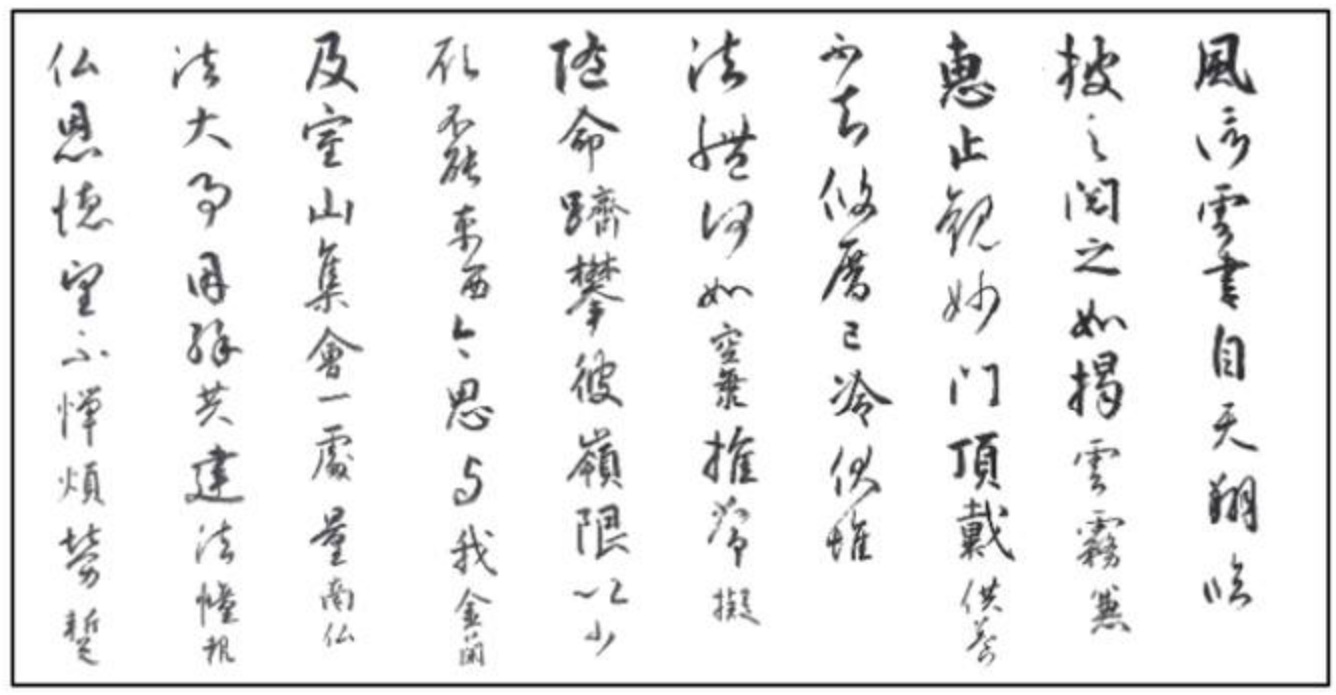
臨書　行書　空海『風信帖』　巻子

「風信雲書、自天翔臨。披之閲之、如掲雲霧。……（略）」

これまでに一部分は書いたことがあったので、最後に全臨してみました。

冒頭の「風信」の二文字の格好良さに惹かれましたが、まだまだ格好良くは書けません。

それでも頑張って、たくさん書きました。



55

覚道直治　四回生

創作　かな　『讃酒歌』　半切

「かんがへて飲みはじめたる一合の二合の酒の夏のゆふぐれ／足音を忍ばせて行けば台所にわが酒の壜は立ちて待ちをる／いざいざと友に盃すすめつつ泣かまほしかり酔はむぞ今夜」

酒好きで知られる歌人、若山牧水の讃酒歌を三つ選びました。讃酒歌を三首かあ。ちなみにこのギャグはシラフで思いつきました。



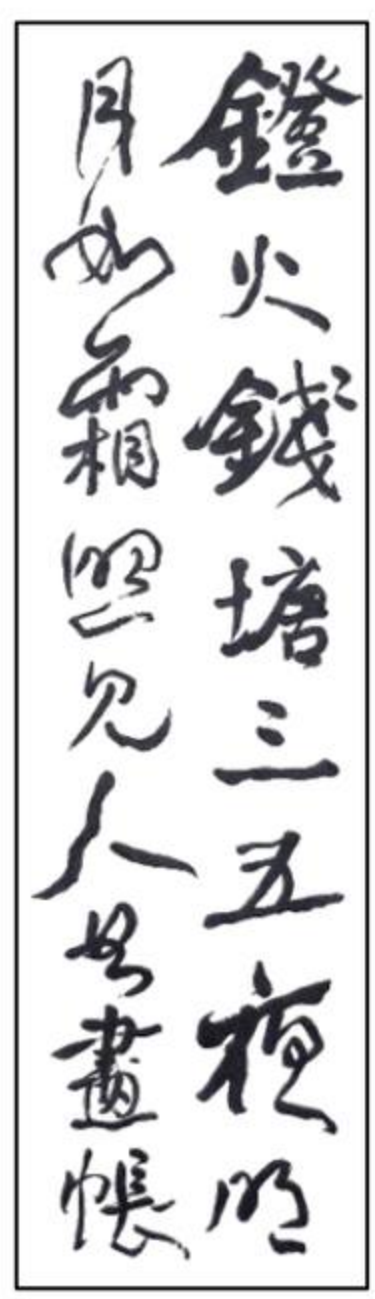
56

金山優作　四回生

臨書　行書　何紹基『蘇軾詞幅』　半切二連

「鐙火錢塘三五夜。名月如霜照見人。如盡帳底吹簫。香吐麝。此般風味應無價。」

楽しいけど、そろそろ飽きてきた（問題発言）



巻子

57

小林由佳　修士一回生
創作　漢字かな交じり　『死神』　47cm×71cm

「川は海へとひろがる
人は死へと溢れる
やり尽くしたかって
西陽が責めてくる」
大森靖子さんの曲より。
日々一生懸命生きたい
なあと思います。



58

坂崎亜実　二回生
臨書　行書　傅山『五言絶句幅』　半切

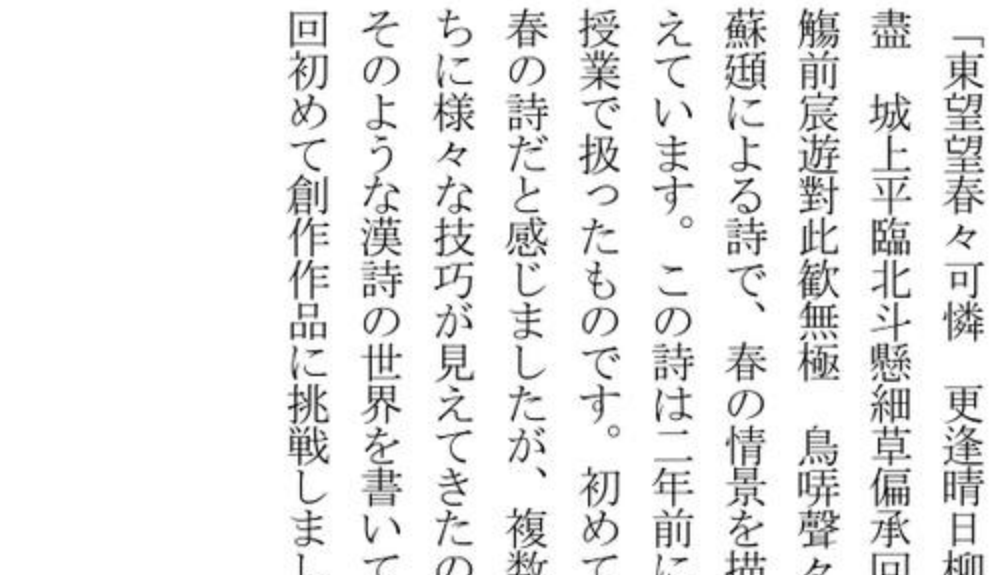
「朝日點（照）紅妝、擬上銅雀臺。書眉未竟、魏帝使人催。」
行書初挑戦です！今まで隷書ばかり書いてきたので、行書に慣れるのが大変でしたが、楽しんで書けました。



59

佐武千寛　修士一回生
創作　行草書　『奉和春日幸望春宮応制』

「東望望春々可憐　更逢晴日柳含煙宮中下見南山盡　城上平臨北斗懸細草偏承回輦處　軽花微落奉觴前宸遊對此歓無極　鳥哢聲々入管絃」
蘇頲による詩で、春の情景を描きながら天子を讃えています。この詩は二年前に受けていた演習の授業で扱ったものです。初めて見たときは平坦な春の詩だと感じましたが、複数人で議論をするうちに様々な技巧が見えてきたのが印象的でした。そのような漢詩の世界を書いてみたいと思い、今回初めて創作作品に挑戦しました。



60

佐山侑莉　四回生
創作　行草書　無題　半切二連

「涼聲度竹風如雨碎影摇窓月在松」
初の二連創作作品です。卒論のテーマが決まらず、筆にも迷いが出ているような気がしないでもないですが、大目に見てください。

NO
IMAGE

61

洲鎌英行　二回生
臨書　行書　黄庭堅『松風閣詩巻』　巻子

「松風閣　依山築閣見平……（略）」
巻子作品に初めての挑戦です。
ドキドキです。



62

杉山太郎　二回生
創作　かな　『与謝野晶子の歌』　半紙

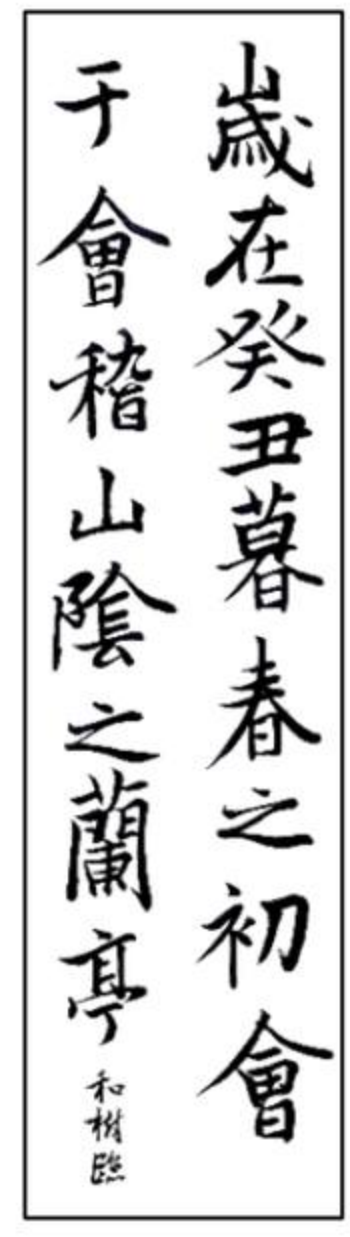
「初夏や吹くもあほるも扇より勝らぬ風のにくからぬかな／梅雨晴れの日はわか枝こえきらきらとおん髪をこそ青う照りたれ」
与謝野晶子から初夏らしい歌を題材に選んでみました。爽やかな雰囲気を出すことができていたら嬉しいです。



63

鈴木和樹　二回生
臨書　行書　王羲之『蘭亭序』　半切

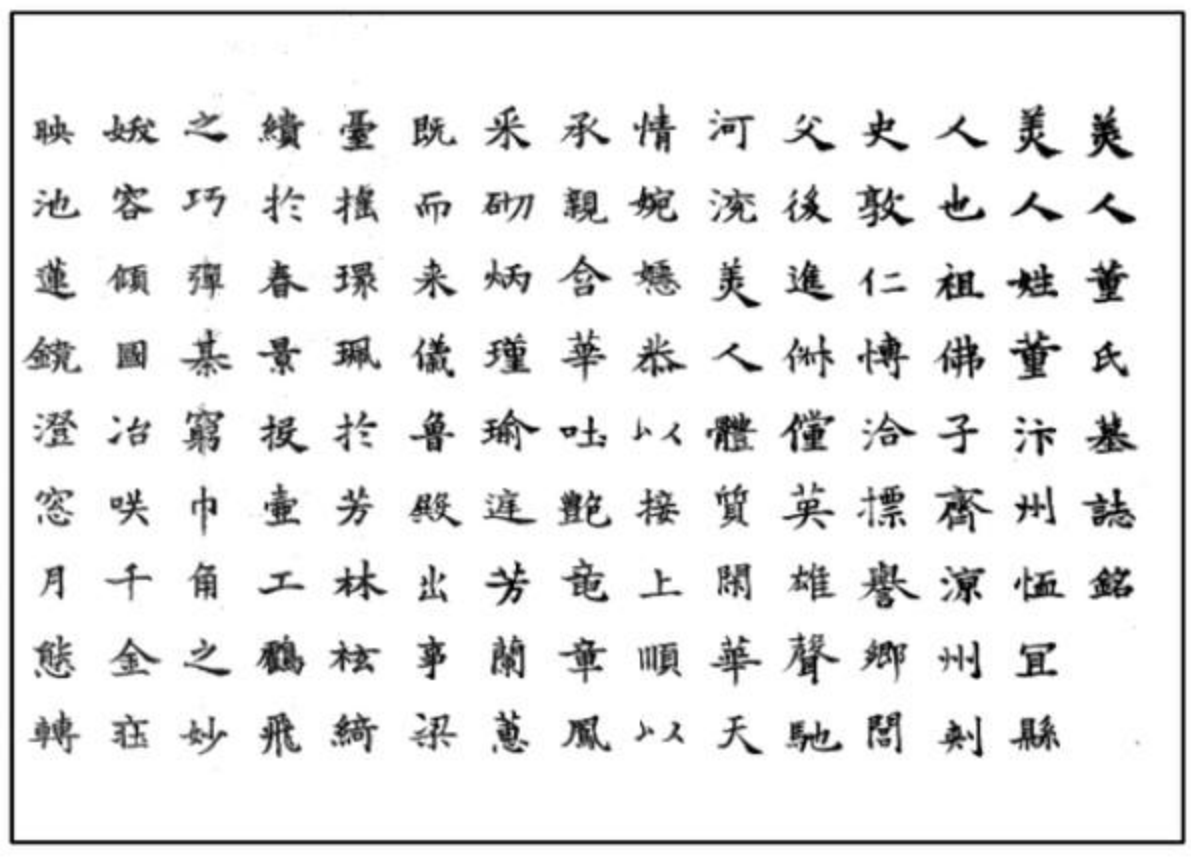
「歳在癸丑暮春之初會于會稽山陰之蘭亭。」
王羲之の蘭亭序を臨書しました。まだまだ練習不足と感じています。



64

中林亮　三回生
臨書　楷書　作者不詳『美人董氏墓誌銘』　巻子

「美人董氏墓誌銘。美人姓董。汴州恤亘縣人也。祖佛子。齋涼州刺史。敦仁博洽。標譽鄉閭。父後進。俶儻英雄。……（略）」
ここでの「美人」とは美しい女性という意味ではなく、隋の時代の女官の役職名だそうですが、この墓誌によると実際にも優れた美人だったようです。楷書の全臨にしては字数が少ないですが、やってみたかったこと（全臨・巻子・細字作品）をいっぺんにできたので、個人的には満足しています。



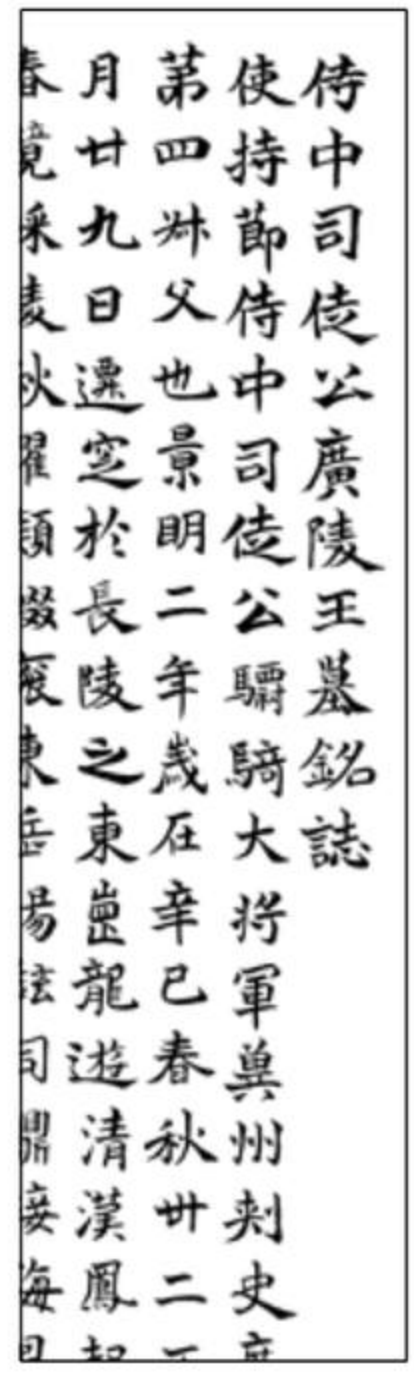
65

仲村康太郎　修士一回生

臨書　楷書　作者不詳『元羽墓誌銘』　半切

「侍中司徒公廣陵王墓銘誌　使持節侍中司徒公鰾騎大將軍冀州刺史廣陵惠王元羽、河南人、皇帝之第四叔父也…（略）」

故人の出自・職歴・事績等を記して墓に埋めたものを墓誌といい、またその銘文を墓誌銘という。土中にあったが故に、発掘時保存状態のよいものが少なくない。ところでこの墓誌銘、なぜか題を「～墓銘誌」に作る。この点奇妙なのだが、それにしても、技巧に流れない伸び伸びとした造形で、嫌味のない、実にいい字である。



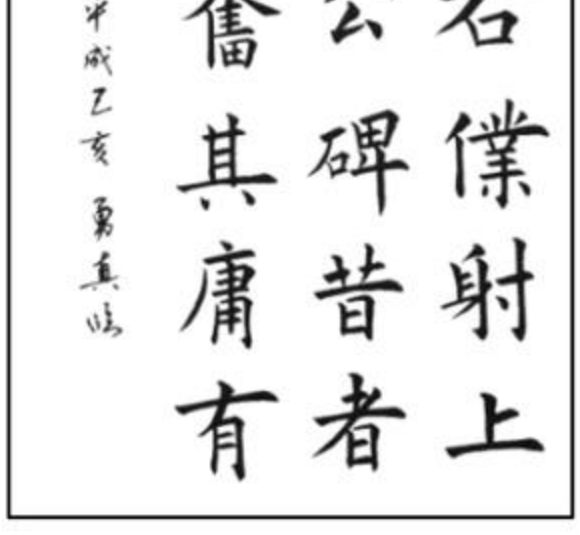
66

中村勇真　四回生

臨書　楷書　欧陽詢『温彦博碑』　聯落

「唐故特進尚書右僕射上柱国虞恭公温公碑昔者帝嬀升歴九官……（略）」

毎回書展では楷書作品を一つは出すようにしているのですが、今回は九成宮醴泉銘と並び、欧陽詢の楷書の傑作とされる温彦博碑を臨書しました。欧陽詢の楷書特有の均整美と厳しさをお楽しみください。



67

野口直哉　二回生

臨書　篆書　作者不詳『泰山刻石』　半切

「皇帝臨立治道運行者産得宜」

初夏ですね。ホトトギスの鳴き声が聞こえてくるような気がします。ところで、ホトトギスってどんな鳴き方するんですか？

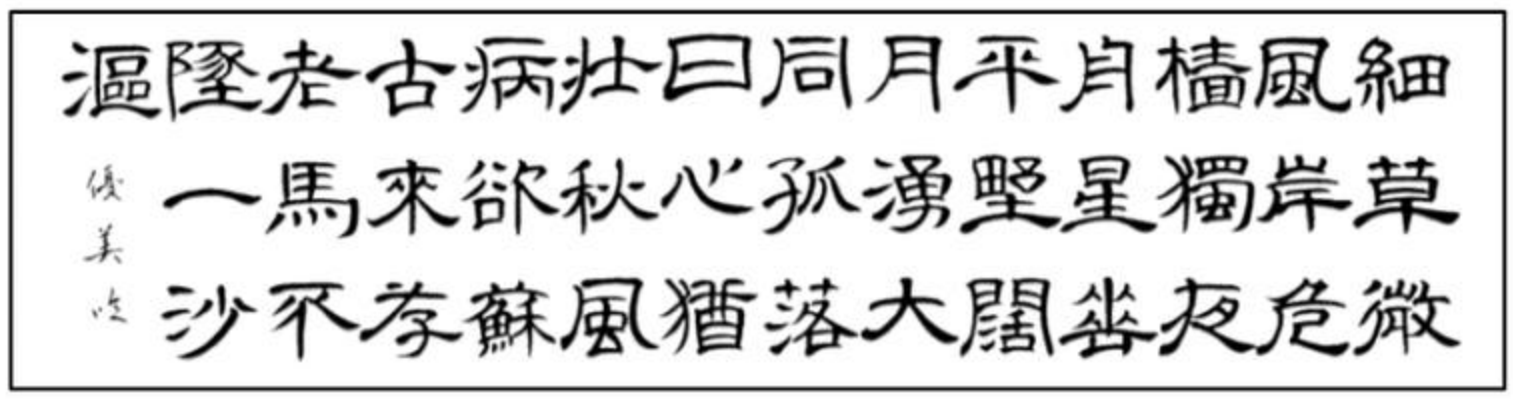


68　挟間優美　四回生

臨書　隷書　巻菱湖『五言律詩　旅夜書懐』　半切横

「細草微風岸危檣獨夜……（略）」

各々時間をかけて書いた力作が並ぶ書展に相応しいものかどうかはさておき、書道が私にとってなんやかんや忙しい中での息抜き的存在に昇格したのは四年間の進歩かなと感じます。息抜きにもってこいな、力まず伸びやかな線に惹かれて臨書しました。



69　原田拓実　修士一回生

創作　かな　『西行桜の歌』　二六横

「憂き世には留めおかじと春風の散らすは花を惜しむなりけり／もろともに我をも具して散りね花憂き世を厭ふ心ある身ぞ」

桜をこよなく愛した西行が散る花に想いを馳せて詠んだ歌二首を書いてみました。



70

原誠人　修士一回生
臨書　隷書　『隷書の研究』　半紙

「永享牟壽上極」（他多数）
「書は一生の仕事」と雖も、環境・書友・自由に恵まれたこの場所での時間はもう長くない。今、今しかできないことを――挙げ句、知識や観念に傾きがちな、およそ芸術に向かない性癖に開き直ることを思いつきました。ということで『研究』シリーズ（予定）第一弾。「作品」と呼ぶもためらわれる、「お稽古」でございますが。



71

松尾有輝也　三回生
創作　刻字　『清徳』　木

「清徳」
刻字をやってみました。篆書の創作も初めてです。新しい自分を見せれたらいいなぁ～って感じです。



72

森ちひろ　四回生
臨書　隷書　作者不詳『木簡』　全紙三分の一　二連

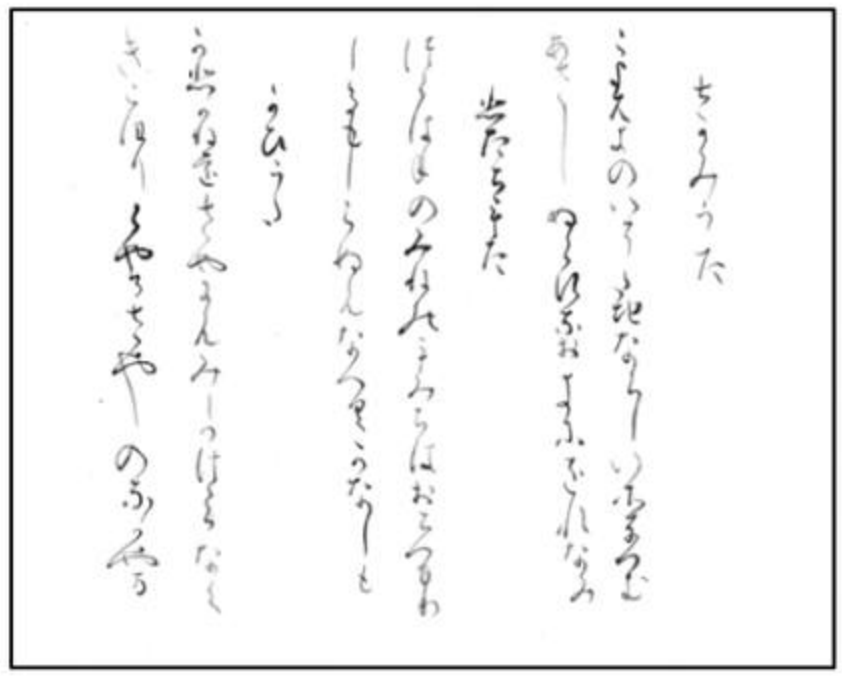
「鄭子方衛益壽史歩昌周千秋趙孺卿爰展世高辟」
自分がイメージする木簡の雰囲気からはまだまだ程遠いですが、初の隷書作品としては充分楽しく書けたので良しとします。



73

吉田凌祐　三回生
臨書　かな　伝紀貫之『高野切第一種』　半懐紙横

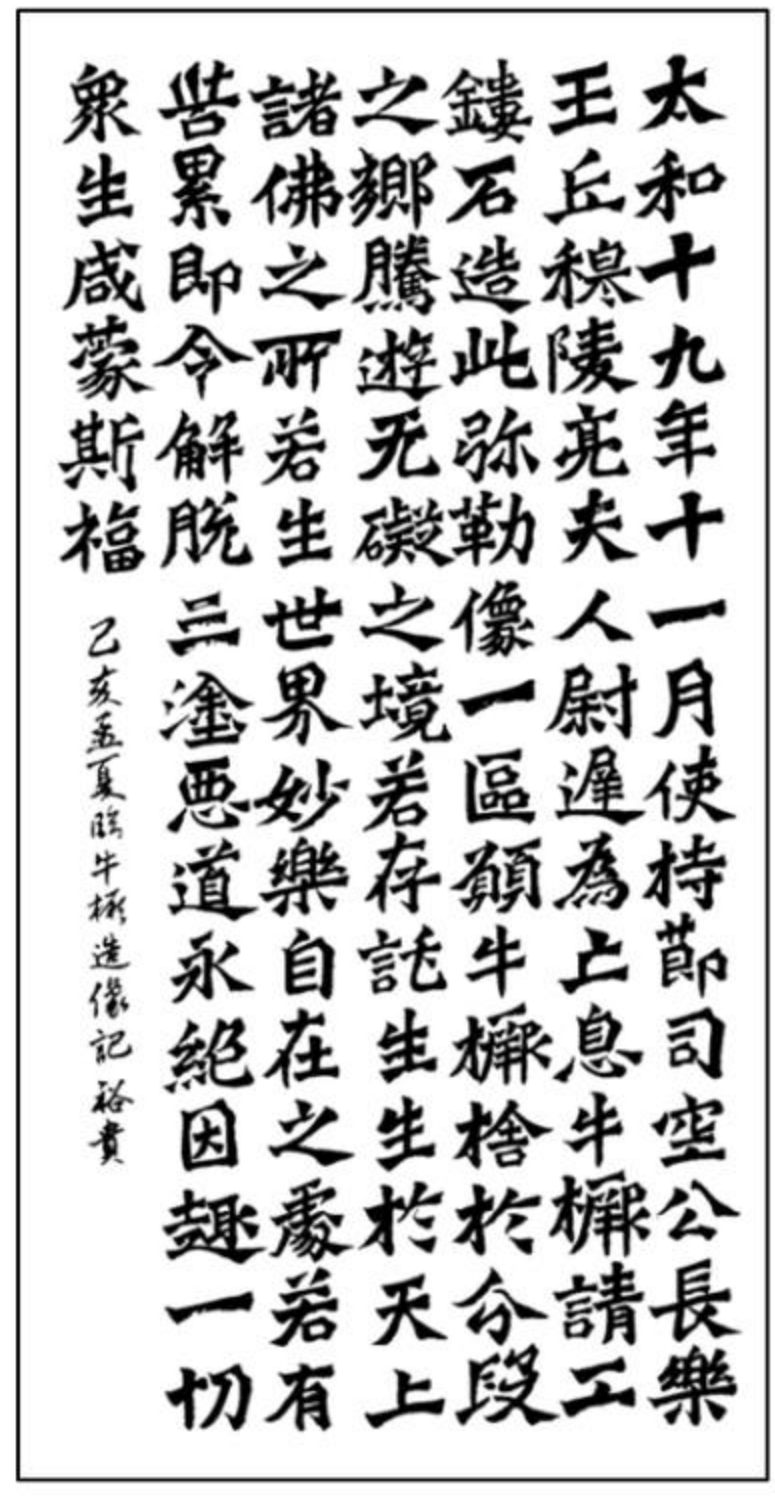
「さ可みうた　こよ呂支のい曽多地ならしい所奈つむあさしぬら須奈お支尓をれなみ　悲たち宇た　徒くは年のみね能毛みちはおちつも利しるもしらぬ无なへ具可なしも　可ひう多　可悲可ね遠さや尓无みし可けゝらなくきこ保りくやるさやの奈可や万」
かなを始めたときから、高野切は七年ほど書いてきています。今回、作品として仕上げるにあたって、これまでの経験を生かした美しい作品にしようと心血を注ぎました。皆様にかなの魅力が伝われば幸いです。



74

渡部裕貴　二回生

臨書　楷書　作者不詳『牛橛造像記』　全紙



「太和十九年十一月使持節司空公長樂王丘……（略）」

オレは高校生探偵、工藤新一。幼なじみで同級生の毛利蘭と遊園地に行って、黒ずくめの男の怪しげな取り引き現場を目撃した。取り引きを見るのに夢中になっていたオレは、背後から近付いて来る、もう一人の仲間に気付かなかった。オレはその男に毒薬を飲まされ、目が覚めたら……造像記を全臨していた。

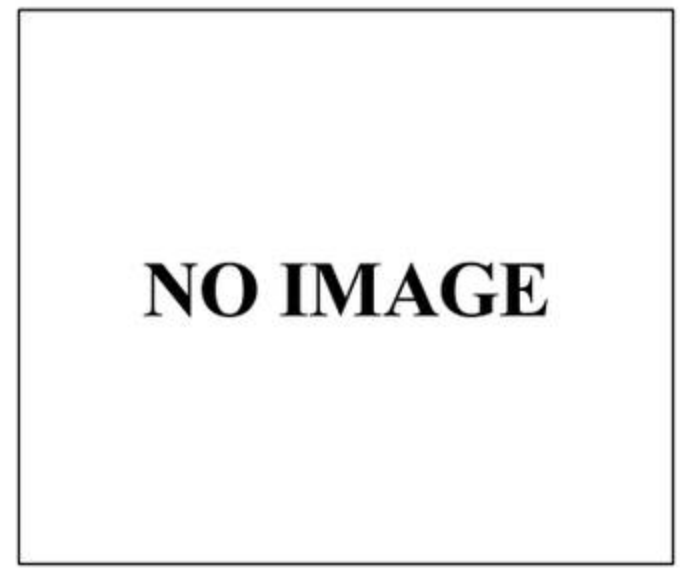
75

原田拓実　修士一回生・原誠人　修士一回生

創作　行書・仮名　『万葉集より』　28.5cm×36cm

「天平二年正月十三日、萃于帥老之宅、申宴会也……（略）」「和何則能尓宇米能波奈知流（わがそのにうめのはなちる）……（略）」「万世尓得之波岐布得母（よろづよにとしはきふとも）……（略）」

たとえ、時代は変わっても。



76

市川拓真　三回生・越田真由　三回生・安田直記　三回生

創作　篆書・行書・草書・隷書　『清平調詞三首』　24cm×24cm×12

「雲想衣裳花想容……（略）、一枝濃艶露凝香……（略）、名花傾國兩相歡……（略）」

仲の良い（？）三人組で四苦八苦しながら書き上げました。ありきたりな書体を変える作品にならないように癖のある字達を選びましたが、悪あがきだったでしょうか。



77

金山優作　四回生・越田真由　三回生

創作　行書・隷書　『遊戯』　半切二分の一　二連

「遊　曷不委心任去留胡爲遑遑欲何之／戯　既自以心為形役知来者之可追」

ゆ-げ【遊戯】〔名〕《古くは「ゆけ」》①仏語。心にまかせて自由自在に振る舞うこと。遊化（ゆけ）。②遊び楽しむこと。ゆうぎ。③楽しく思うこと。喜ぶこと。



文具四寶（筆・墨・硯・紙）和紙工芸品　書画作品

書芸サロン 賛交（さんこう）

二条店　〒604-0931 京都市中京区二条通河原町西入北側
TEL・FAX：075-222-0390
E-mail：info@shoga-sankou.co.jp
URL：http://www.shoga-sankou.co.jp
株式会社 賛交社 本社 〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町 27
TEL：075-572-8964／FAX：075-572-8905

掛軸 文房四宝 和紙の店 書楽

〒605-0012 京都市東山区東山三条東入南側
TEL.075-762-2330／FAX.075-751-6571
syoraku@aioros.ocn.ne.jp
〈日曜・祝日定休〉

書道用品と表装・額装 書遊

充実のECショップ 書遊Online 書遊 検索
ポイントがとってもお得なオンラインショップ http://shoyu-net.jp/

書遊奈良本店	〒630-8243	奈良市今辻子町３７ TEL.0742-23-5547／ FAX.0742-20-2261
書遊大阪店	〒553-0003	大阪市福島区福島 5-14-6 クレセントビル 2F TEL.06-6458-8808／ FAX.06-6456-4077
書遊京都店	〒604-8132	京都市中京区高倉通三条下る丸屋町 164 TEL.075-251-7800／ FAX.075-251-7802
書遊松島堂	〒320-0058	栃木県宇都宮市上戸祭 3-2-25 TEL.028-678-6705／ FAX.028-678-6551
書遊札幌アメミヤ店	〒060-0061	札幌市中央区南一条西２丁目５南一条 Kビル5F TEL.011-398-9400／ FAX.011-398-9401

京都・書道用具店
松楳園

一般用の書道道具からプロ専用の用具まで幅広く取り扱いしております。小売もしておりますので、お気軽にお越し下さい。

取扱商品
書道用具全般
毛筆・松楳園製
毛筆・中国製
墨・墨液 各種
紙・漢字・かな用
硯・下敷・印材
他・書道小物
水墨画用具

京都市下京区柳馬場通仏光寺下る万里小路町164
TEL 075-351-6380　FAX 075-361-8006
http://:www.shoubaien.co.jp　定休日（日・祝日）

香/筆/和風文具/香道具/茶道具
鳩居堂

〒604-8091　京都市中京区寺町姉小路
上ル下本能寺前町 520
営業時間 10～18 時　定休日（日曜日）
TEL. 075(231)0510　FAX. 075(221)5987
地下鉄東西線市役所前駅下車 5 番出口
http://www.kyukyodo.co.jp

京筆・京文房

りゅう　し　どう
龍 筆 堂

京都　〒604-0916　京都市中京区寺町通二条上ル
TEL.075-252-4120　FAX.075-252-0006
東京　〒102-0072　東京都千代田区飯田橋四丁目六の二
東洋美術印刷本社ビル一階
TEL.03-3239-0733　FAX.03-3239-0731

墨筆硯紙 書道用品一式

京都 古梅園

〒604-0916
京都市中京区寺町二条上る
TEL（075）231－1531
FAX（075）231－0272



かな料紙・京染和紙
加工紙・画仙紙・半紙他
書道用和紙の専門店

紙の 津久間

京都市下京区新町通花屋町下ル
TEL（075）371－8186（代）
FAX（075）371－8189

【顧問・部員紹介】

顧問：京都大学大学院文学研究科教授　宇佐美文理
京都大学人文科学研究所図書掛　行友三輪子

技術顧問：日展会友　書道家　寺本蒼玄

一回生

医　石田七彩
農　乾未樹
文　大橋明日香
医　片岡美緒
医　釜田弘一朗
法　栗原瑞樹
工　高新莉
医　近藤毅
工　佐藤有造
京女　鈴木翔子
工　鈴木翼
法　関美乃
理　田中柚月
文　豊留まり
経済　益満朋佳
農　松岡柚花
農　尤雨金
教育　藍予智
経済　渡辺真帆

二回生

理　秋友祥香
農　穴田小恵
総人　伊藤迅亮
農　岩田恵理子
総人　内田鈴菜
農　小笠原萌葉
医　岸根葵葉
工　北田綾
工　坂崎亜実
農　柴田達哉
工　洲鎌英行
文　杉山太郎
工　鈴木和樹
理　瀧田菜友
農　豊永嵩晴
法　中村紀保子
工　野口直哉
農　服部佳乃子
工　野宮航太
法　森島奈実
工　渡部裕貴

三回生

文　石本森羅
工　市川拓真
工　鵜川大輝
文　牛田聡実
法　大橋葵
農　小池莉穂
工　越田真由
法　坂本和歌子
文　寺田奈津美
同志社　中岡大吉
工　中林亮
同志社　野田恵子
工　松尾有輝也
工　安田直記
理　吉田凌祐

四回生

法　安達光寿
工　覚道直治
京先　勝野初紀
法　金岡杏祐
工　金山優作
工　金祺民
工　邢書禹
医　佐山侑莉
法　建部壮一郎
理　中村勇真
医　野田智子
文　挾間優美
工　一二暉生
文　平井達也
ダム女　別府華
法　村上友梨
京女　森ちひろ
農　吉岡智志

修士一回生

工　阿部朱夏
医　今村朱里
工　郡健一郎
農　小林由佳
文　佐武千寛
工　角裕介
文　仲村康太
工　橋詰都
農　長谷佳菜
理　原誠人
工　原田拓実
法　平野晶子
工　ハンナ
人環　深谷拓未
農　堀場菜摘
法　三村祐貴子
工　宮部大志
工　矢野凱己
工　山口和樹
工　山科直也
工　渡辺顕

修士二回生

農　木下有羽
府医　木高早紀
医　下坂桃代
人環　薛楽
薬　竹内春佳

六回生

医　岡本晴香
府医　木高早紀子
医　下坂桃代郎
人環　薛楽
薬　竹内春佳

博士一回生

理　上西隆太
農　釜阪紘平
理　疋田研一郎

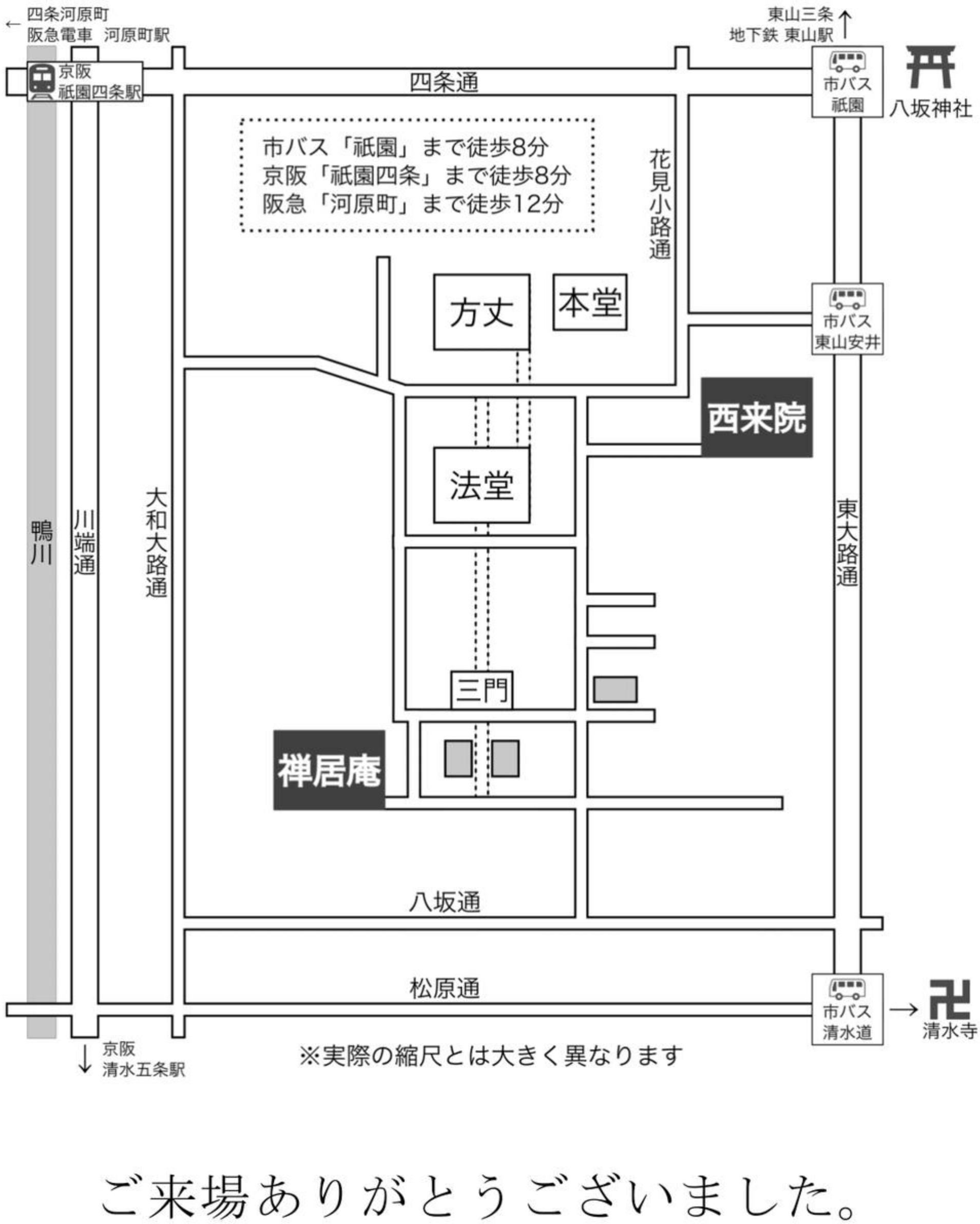
博士三回生

法　大泉陽輔
医　川上澄香

博士課程修了

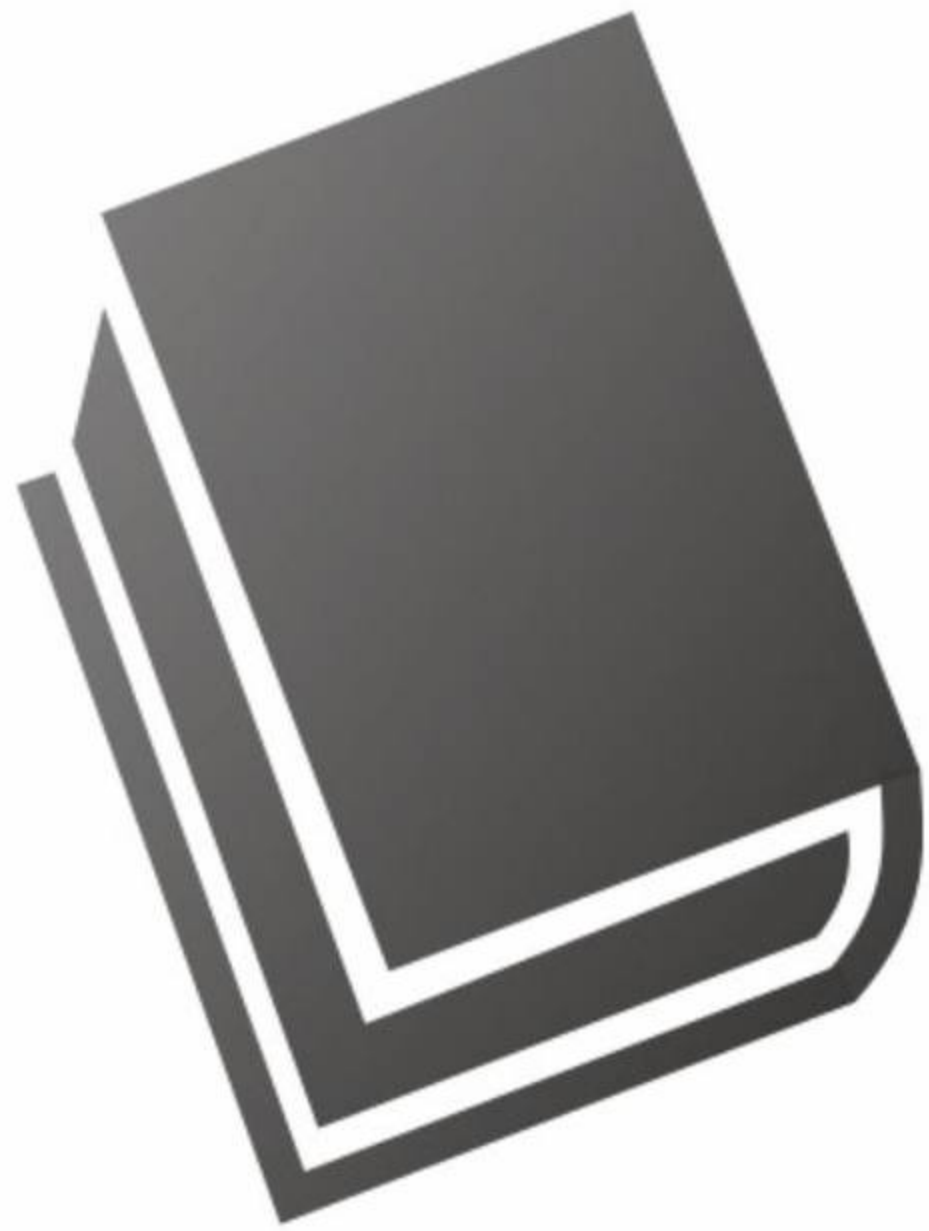
地環　藤井基弘

—建仁寺案内図・周辺地図—



ご来場ありがとうございました。

京都大学書道部



This book was
made by the LeME